



千葉大学医学部同窓会報 第133号

題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元みのはな同窓会長)

編集発行者
千葉大学医学部
みのはな同窓会報編集部
〒260-8670 千葉市中央区玄阜1-8-1
千葉大学医学部内
みのはな同窓会
電話 (043) 202-3750
FAX (043) 202-3753
e-mail : idosokai@med.m.chiba-u.ac.jp
HP : http://www.inohana.jp/

最終講義

平成15年2月6日3時より、視覚病態学安達恵美子教授による最終講義「君のひとみに乾杯」が千葉大学医学部附属病院第一講堂で行われた。前半部分では、教授自ら開発された電気生理学的機器の紹介、それによる研究、データ処理に電話回線を利用した苦労話もされた。後半部分では、目

に関する絵画、映画、音楽に触れ、教授の芸術に関する博識を披露された。君のひとみに乾杯は名画カサブランカから Here's Look at you, Kid! の名訳である。講義の最後に「名医より良医たれ」というスライドが、安達教授の臨床をすべて物語る言葉であった。講義終了後、学生代表の謝辞、花束贈呈が行われ、引き続き、第三講堂で記念パーティが開かれた。同窓の諸先生方、現役教授、名誉教授、学生、医局員を大勢集めて改めた乾杯を行



附属病院長に藤澤武彦教授 (昭42)

平成15年3月31日をもって任期満了となった伊藤晴夫前附属病院長の後任として、藤澤武彦胸部外科学(旧肺研・第一)教授が新附属病院長に就任された。任期は本年4月1日より平成17年3月31日である。(挨拶文は2面に掲載)



大学院医学研究院長に福田康一郎教授 (昭41)

福田康一郎自律機能生理学(旧生理学第二)教授が大学院医学研究院長に再任された。任期は本年4月1日より平成17年3月31日である。(挨拶文は2面に掲載)



大和田英美教授

基礎病理学大和田英美教授の最終講義「肺癌の病理」は、平成15年2月7日千葉大学医学部附属病院第一講堂にて行われた。発生母地としての癥痕、遺伝子異常、神経内分泌分化、喫煙と増殖能、重粒子線治療の効果について、基礎的および臨床



安達恵美子教授

平成15年6月21日(土)午後3時30分より
場所 銀座アスターお茶の水賓館(TEL03-3293-8011)
総会次第
会長挨拶
(1)会務報告
(2)議案
1 平成14年度決算承認の件
(1)決算報告
(2)監査報告

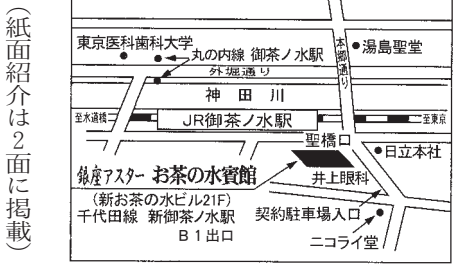
本年度の「みのはな同窓会」総会を左記により開催致します。同封の葉書にて出欠の返事をお送りください。(6月14日必着)。
日時 平成15年6月21日(土)午後3時30分より

床病理学的研究成果をお話しされた。講義終了後、学生代表の謝辞、花束贈呈が行われた。引き続き、第三講堂で記念パーティが行われ、名誉教授の先生方、学内外の先生方、多数の学生が出席し、大盛況の内に終了した。(基礎病理学 廣島健三)

「医学部・大学院学制改革」
千葉大学大学院医学研究
院長
福田康一郎 教授

一講堂にて行われた。「法医学の実際と研究」と題して、法医鑑定の仕事みとその重要性について説明され、関与された約350体の解剖の中から貴重な鑑定例を示された。また、HLA型の血清学からDNAまでの推移を背景とした研究については身元不明死体の個人識別への応用例を話された。講義終了後、第三講堂にて祝賀パーティが行われたが、名誉教授をはじめとする学

内外の先生方、警察関係者、多数の学生の参加により大盛況のうちに終了した。(法医学 佐藤彌生)



(紙面紹介は2面に掲載)

懇親会
会費 一万円(当日受付にて申し受けます)
なお東京のみのはな同窓会
は午後3時に開催致します。



木内政寛教授

医学研究院長再任の挨拶

福田 康一郎 (昭41)

この度、医学研究院長に再任されましたので同窓の皆様様に謹んでご挨拶を申し上げます。

最近の医学研究院・医学部・医学部附属病院を取り巻く状況はまことに厳しい状況です。ご承知のように、平成16年4月からの国立大学の法人化、21世紀COE構想(現在、4件を申請中)、平成15年からの大学病院への包括制度の導入、平成16年4月からの卒後臨床研修の必修化、また、社会的な批判に対応し、国際的な観点からも強く求められている医学教育改革の急速な進展など、全てがほぼ同時に進行しています。

法人化に対しては、以前より具体的な検討をしており、組織改革の面では、教員の職能分担制(教育、研究、診療、地域学外協力に区分)と一定期間ごとの再審査制導入による活性化、経費削減の方策、他学部・地域と連携した教育研究拠点形成などを進めており、これらを医学研究院・医学部の中期計画として提出してあります。法人化法案が国会を通過後、省令が定められて具体的な制度化が行

附属病院長に就任して

藤澤 武彦 (昭42)

平成15年4月1日より、伊藤晴夫病院長の後任として、病院長を拝命いたしました。もとより微力ではございますが、抱負の一端を述べさせていただきます。

附属病院の使命と役割は、先端医療の開発と推進を行う研究開発機能および将来の医療を担う優秀な医療人の育成を行う教育研修機能に加え、地域の中核病院として専門性を有した質の高い医療の提供を行う医療提供機能であり、平成16年4月からの国立大学法人化と卒後臨床研修必修化を控へ、附属病院には実効ある的確・迅速な対応が求められております。特に従来と大きく異なるに、経営的センスが強く求められております。現状に満足することなく、この大きな変革の時を附属病院における臨床研究、教育、診療のレベルの大きな上昇のチャンスと捉えて、病院における機構改革、意識改革を断行していただくことが大切であります。

国立大学の法人化は民間的手法を含む競争原理の導入による活性化が目的であり、学長権限の大幅な拡大により、学長のリーダーシップが発揮できるシステムといわれております。従来は附属病院として独自に配分されていた予算は、法人化後には千葉大学全体に運営費交付金として配分されるため、その配分を決める役員会(学長を含む7名で構成)に病院の代表が入ることが重要となります。千葉大学全体のうちに占める附属病院の総予算の割合から、附属病院の収支の良し悪しが千葉大学そのものの運営に大きな影響を及ぼすことから、附属病院においては戦略的経営が不可欠となつてきております。病院経営と直結して診療報酬制度の変革、特に包括評価方式の導入は特定機能病院である大学医学部附属病院を中心開始されます。本院では6月1日より始まり、経営的には不確実な点も含まれますが、従来通りの稼働率と在院日数であれば診療報酬は余り変わらないように設定された方式ですが、在院日数を短縮することにより、その利点をとって病院経営に生かせればと考えています。



診療科の再編を最重要課題として進め、平成16年4月からは病院全てのシステムおよび標示が臓器別あるいは疾患別に移行します。これにより、従来より患者様に分かりやすくなることも、効率のよい診療を行うことが可能になるものと考えております。診療科は大きく6診療部門制となり、内科診療部門には消化器内科、血液内科、腎臓内科、アレルギー・膠原病内科、糖尿病・代謝・内分泌内科、循環器内科、呼吸器内科が、外科診療部門には心臓血管外科、食道・胃腸外科、肝胆膵外科、乳腺・甲状腺外科、呼吸器外科、麻酔・疼痛・緩和医療科、腎・泌尿器・男性科が、感覚・運動機能診療部門には眼科、整形外科、皮膚科、耳鼻咽喉科、頭頸部外科、形成・美容外科、歯科・顎・口腔外科が、脳神経精神診療部門には脳神経外科、精神神経科、神経内科が、小児・母性・女性診療部門には婦人科、周産期母性科、小児科、小児外科が、放射線診療部門には放射線科がそれぞれ所属することになっております。このような診療科の再編は大学病院始まって以来の大変革であり、当然痛みを伴う部分もありますが、患者様のサイドにたつて再編の作業が進んでおります。

卒前・卒後教育ならびに生涯教育に関しては卒後臨床研修部を中心に卒前・卒後の新しい教育システムが開始されており、平成16年度からの医師の卒後研修必修化に向けて、研修プログラムが学生に提示され、病院群の形成等の準備が進んでおります。現在、大学病院では約150名の研修医が毎年入ってきておりますが、来年度からは約100名に減少し、しかも法人化に伴い教職員の安全衛生管理が人事院規則から労働安全衛生法へ変更されることから、研修医の労働時間も大幅に制限され、病院におけるマンパワーの低下は極めて深刻であると考えられます。医療行為の標準化と効率化を安全面の許す限り進めていかなければならないものと考えております。

紙面紹介

就任の挨拶	2~7面	入学者・卒業名簿	16~17面
追悼文	7~8面	常任理事会議事録	17~18面
附属病院の今後の課題	8~9面	10年振りに亥鼻祭開催	18面
同窓会員著者の紹介	9面	附属病院ニュース	19面
人事異動	9面	HSP患者シミュレーター	19面
随想	10~11面	導入される	19面
クラス会	11~12面	エッセイ	20面
各地めのはな会だより	12~15面	学外研究助成募集要項	20面
		めのはな同窓会賞受賞者決定	20面

整備と患者様へのサービスの向上は極めて重要であります。多様な患者様の要望に対処することが不可欠で、スペース的にも、精神的にもより余裕のある入院生活を過ごされることが出来るよう、新病棟建設計画が進み、平成18年に完成の予定であります。

附属病院の使命は先端医療の開発であることは当然であります。新病棟に先端医療を開発する組織を設置し、病院全体としてそれに取り組んでいかなければならないものと考えております。診療においては従来の画一的な治療計画から脱却し、患者様1人1人の病態・病状に合わせた、Tailor made medicine を確立し、患者様本位の医療を人間性の尊重を中心として実践することが重要であります。現在計画されている高度先進医療は遺伝子診断・治療、免疫療法、組織工学・再生

医学、臓器移植、難病研究・治療、高次脳機能疾患の診断・治療、創薬医学の開発などが、これらの先進医療をさらに推進させるべく、医学部はもとより、他学部との連携、放射線医学総合研究所との共同研究などのネットワーク形成が進んでおります。これらの中から近い将来、附属病院独自の薫り高い高度先進医療が開発されるものと信じます。

地域医療機関との連携の強化は病院の将来を決めるほど重要であると考えます。今後更に地域医療連携室を強化し、紹介状への返信や逆紹介先への連絡等きめ細かな対応が求められているものと考えております。患者様へのサービスのみならず、千葉大学医学部附属病院を一般社会の皆様を知っていたくために病院、診療科、診療部門における医療情報の公開を進めたいと考えます。また附属病院はるのほな同窓会員の皆様との連絡網を緊密にし、最新の病院の動きを知っていたくべく努めたいと考えております。

病院長を拝命して早速、SARS に対する対応が飛び込んでまいりました。本院では4月21日より2床の

陰圧室で対応する体制を整えました。成田空港をもつ千葉の地域性から嚴重な警戒体制が不可欠と考え、感染症管理治療部を中心に成田検疫所、千葉県健康福祉部および千葉市との緊密な連携体制が構築されております。この準備が杞憂であって欲しいものと祈っております。

以上千葉大学医学部附属病院における現状および今後のあり方につき意見を述べさせていただきます。この変革の時期を附属病院の更なる発展の好機と考え、努力してまいりたいと考えます。千葉大学医学部附属病院および同窓会員の皆様のご指導とご支援をお願い申し上げます。

も有数の港湾を有する国際都市であります。人口も平成14年には60万人に到達し、日本で第6位の人口を有するようになりました。人口が50万人以上の都市で、一つの大学で司法解剖を行っているのは千葉大学だけです。千葉大学での解剖数は昨年度は183体と、当然の結果ではあります。日本でも多くの解剖をする国立大学の法医学教室のひとつになっております。そのような状況で、解剖体数はこれで足りているのかというと、国際的に見て人口600万の都市で行うべき適切な解剖数は100体以上であると考えられ、まだまだ少ないと言わなければならない。しかしながら、現在の解剖体数でも、千葉大での人員・設備のもつキャパシティを既に超えており、これからのように対処していこうか、頭が痛い所であります。

うと思われれるのですが)、各地方に医務院類似の施設を作りたいという動きも出てきて、ますます複雑な制度になっていきかねない雰囲気を感じます。私は、大学の法医学教室のキャパシティが高ければ、行政解剖と司法解剖の区分は不要であると考えるので、監察医制度を導入するのは急激に増加する解剖数に対する緊急回避策としては良策であるうと思いますが、大学の法医学教室に適切な資金・人員・設備があれば、全ての異状死体の解剖を行政・司法の区分なく大学の法医学教室で行うべきであると思っております。そのために、法医学教室は独立行政法人化をきっかけに、相応な資金を調達することを目標とすべきであると感じております。できれば、千葉を発信源に、良い方向へ持っていければいいなどとも思うのですが、大口を叩くだけで終わってしまうのではと畏れてもいます。しかし、是非とも頑張りたいと思っておりますので、どうか、同窓会の皆様からの、ご支援、ご指導、ご鞭撻を賜われれば幸いです。

私は、平成15年4月1日付けで千葉大学の法医学教室の教授に着任いたしました。私は平成5年に東京大学医学部を卒業後、東京都立豊島病院で内科研修をしながら東京大学法医学教室に入局し、同教室で大学院生、助手、講師、助教授を経て、現在に至っております。千葉は私の生まれ故郷で、中学時代までは千葉大学医学部の近くの末広町に住んでおり、亥鼻地区は私



教授就任挨拶

法医学

岩瀬 博太郎 (東大平5)

子供のころの遊び場所の範囲内でした。そのため、新任教授として参ったものの、なんとなく懐かしい気持ちでおります。そのような、私にとっては不思議なご縁のある千葉大学なので、千葉大学のために尽力できることを幸せに感じております。

赴任前より、千葉大学の法医学教室では解剖が多いということは存じており、覚悟してやって参りました。実際に来てみて、確かに解剖の多さに驚いております。しかし、その反面やりがいを感じております。千葉は、東京への玄関口である成田国際空港を持つ上、日本で

とところで、日本の主要都市に監察医制度を置き行政解剖なるものを行う制度が始まったのは、戦後の進駐軍の命令によるものでした。その後、一度もこの制度が見なおされることはなく、行政解剖と司法解剖の奇妙な共生状態が長く続いております。大学にキャパシティがないことが原因で(ある

うと思われれるのですが)、各地方に医務院類似の施設を作りたいという動きも出てきて、ますます複雑な制度になっていきかねない雰囲気を感じます。私は、大学の法医学教室のキャパシティが高ければ、行政解剖と司法解剖の区分は不要であると考えるので、監察医制度を導入するのは急激に増加する解剖数に対する緊急回避策としては良策であるうと思いますが、大学の法医学教室に適切な資金・人員・設備があれば、全ての異状死体の解剖を行政・司法の区分なく大学の法医学教室で行うべきであると思っております。そのために、法医学教室は独立行政法人化をきっかけに、相応な資金を調達することを目標とすべきであると感じております。できれば、千葉を発信源に、良い方向へ持っていければいいなどとも思うのですが、大口を叩くだけで終わってしまうのではと畏れてもいます。しかし、是非とも頑張りたいと思っておりますので、どうか、同窓会の皆様からの、ご支援、ご指導、ご鞭撻を賜われれば幸いです。

本年4月1日付で、安達 恵美子教授の後任として、視覚病態学講座を担当させて頂く事となりました。着任して日が浅く、また1989年に大学院を卒業して以来の亥鼻暮らしのため、文字通り右も左も判らぬ毎日をお過ごししております。

私は、大学院卒業の翌90年、当時千葉大学出身の窪田靖夫教授のおられた富山医科薬科大学眼科に講師として赴任いたしました。91年からの2年間は米国コロンビア大学眼科の Post-Graduate 教授の下で、網膜移植の研究に取り組み、その後の研究活動の基礎を作っております。

帰国後は、富山医大において地域中核病院としての臨床の責務を果たしつつ、研究を続けておりましたが、97年に東邦大学の竹内忍教授の招きにより、佐倉病院眼科に助教授として赴任いたしました。東邦佐倉の眼科には、竹内教授の名を



視覚病態学 (旧眼科学講座)

山本 修一 (昭58)

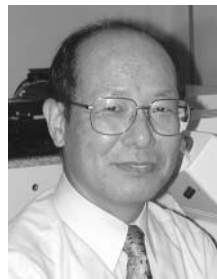
慕って日本全国から網膜硝子体疾患の患者が集まり、手術件数は年を追うごとにうなぎのぼりに増え続け、2000年にはついに年間160件を達成するに至りました。その竹内教授は2001年4月に東邦大学大橋病院眼科に移籍となり、その後任として私が佐倉病院眼科の教授に昇任致しました。佐倉病院において眼科はまさに「稼ぎ頭」であり、いかに効率よく安全に、しかも高度な医療を行っていくかが大命題であり、日々腐心して参りました。包括医療の導入、独立行政法人化に向けてのささやかな経験が少しでもお役に立てれば幸いです。

今後は、千葉県のみならず関東一帯の眼科医療の質的向上に力を注ぎつつ、研究面では網膜移植研究をさらに発展させて再生医療としての実用化を目指して進んでまいりたいと考えております。浅学非才な身ではありますが、同窓会の先生方の一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



形態形成学(旧解剖学第二講座)

年 森 清 隆 (熊本大昭50)



4月1日付で千葉大学大学院医学研究科・形態形成学教室(旧第二解剖学)を主宰させて頂くことになり、宮崎医科大学から転任いたしました。実績と歴史を兼ね備えた千葉大学で教育と研究を行う機会を与えられたことを幸せに思っています。略歴と抱負を簡単に記してご挨拶といたします。

成果は、最近話題となっている不妊症のメカニズム解明や治療法に関係しています。研究手法は、従来の電子顕微鏡を含めた超微細構造レベルでの解析や蛍光抗体法等の免疫組織細胞化学的手法を加えた画像解析です。機能的解析のためには、生化学的・生理学的手法を用いています。最近では、卵子内への精子注入や単クローン抗体注入(共にマイクロインジェクション)として遺伝子改変後の形態解析を加えた研究を進めています。結果として、分子・細胞・組織から個体レベルに至る解析の流れとなりました。このような私の研究は、昭和50年代の生体内受精の解析に始まり、昭和59年〜61年までの米国・国立衛生研究院/NIH(NIHES)での単クローン抗体の作成と応用、昭和62年〜平成2年頃までの心房性ナトリウム利尿ホルモン(ANP)に関する免疫組織細胞化学的法として最近の遺伝子レベルを含めた分子細胞生物学的研究法という大きな柱があります。特にこの数年間は、癌研、大阪大学、東北

大学、筑波大学そして理研等関東や関西の研究機関の先生方と共同研究を進めてきました。そのような流れにあった私にとりましては、千葉大学で教育・研究の機会を与えられましたことは大変幸せです。

昨年度、古巣の宮崎医科大学は、研究トップ30であるCOEを獲得しました。その端緒はANPの研究でした。千葉大も多大な可能性を秘めており、その中で大学の改革を迎える事ができるのは幸せだと思っております。生活の基盤となる住環境の良さは、宮崎と同じか、それ以上だろうと思っております。千葉は、地の利を含めてバランスのとれた場所であり、世界に対して大きく窓を開いています。幾つかの夢を持って千葉大にやって参りました。約3週間を経た現在、車のナンバーも『千葉』ナンバーに変わり、身も心も千葉人になって活動しています。研究室も整理できつつあります。今後、ゐのはな同窓会の皆様には様々の点でお世話になります。どうぞ、よろしくお願いいたします。

平成15年3月1日付けで千葉大学医学部附属病院光学医療診療部教授に就任致しました。平成8年度に国立大学病院としては4番目に本学に光学医療診療部設置の概算要求が付き、当時、国保成東病院院長として赴任6ヶ月目の小生に部長として戻るか否かの打診があり、受諾させて頂きました。膨大な赤字経営の成東病院の院長として黒字経営化にするための方向性を具体的に職員に提示し、平成8年8月1日に助教・部長として大学に戻りました。その後6ヶ月間は試行錯誤の日々でしたがこの間、病院職員関係の方々の御助言に助けられ、光学医療診療部としての独自の外来診療を開始するに至りました。積極的に内視鏡治療を開始してからは、72時間ルール、空床利用の病院の方針により、食道・胃・大腸の早期癌の治療をクリティカル・パスの導入により平均4日

千葉大学医学部附属病院光学医療診療部

神 津 照 雄 (昭44)

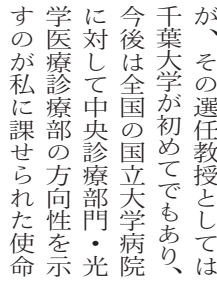


間の入院で対応し、年々その業績を上げて参りました。そしてこの度、教授職に推挙して頂いた次第です。さて現状の大学病院における目先の課題は本年6月1日から始まる包括診療と平成16年から開始されるスーパーテーション、さらには平成16年度からの独立行政法人化の問題点が大きな課題であります。前2者は当部としては現時点でクリア出来る状態に参っております。問題は3番目の課題ですが、大学の本来使命である教育・研究・診療に加えて経営の問題点が要求されています。光学医療診療部としてはこの点も十分に対応できるのですが、ただ問題はコスト漏れを如何に防止できるかに尽きます。医事課と直結出来る体制構築が急務の作業と考えております。

病院の新棟計画も着実に進行中です。昭和52年に出来上がった現在の病院も当時は予想されなかった疾病構造の変化、治療手段の飛躍的な進歩もあり、そのため患者さんには診療までのアメニティーについてご不便をおかけしている現状が部長としては心痛です。現在では全国42国立大学病院のうち31大学に光学医療診療部が設置されておりますが、その選任教授としては千葉大学が初めてでもあり、今後は全国の国立大学病院に対して中央診療部門・光学医療診療部の方向性を示すのが私に課せられた使命と痛感しております。低侵襲性の治療を目的とする当部の基本的な方針は「まず診断学があり、治療学がある」であります。治療についてもあくまでも Intra-luminal Surgery の究極

附属病院総合診療部

生 坂 政 臣 (鳥取大昭60)



3月1日付けで千葉大学医学部附属病院総合診療部に着任しました。今回の選考結果が発表されたからの周囲の異様な盛り上がりを見て、千葉大学医学部の伝統の重みをひしひしと感じているところです。今回の選出に最も驚いている当の本人は、5年間勤務した聖マリアンナ医大総合診療内科の講師を昨年3月に辞し

を以て、埼玉県本庄市で義父の診療所の副院長として、2人の後期研修医を指導しつつ充実した開業生活を送っており参りました。開業医から選出された教授というのは歴史的にも稀らしく、このことが周囲を驚かせた理由の一つのようです。しかし、プライマリケアを20番目の専門科として認知させるレベルにまで高めることに成功した米国家庭医療科では、開業経験のない医師が教授のポストに就くことはないのです、その意味では今回の選考は、この領域のグローバルスタンダー



ドに鑑みた斬新な判断と言えなくもありません。この先、千葉大総合診療部が成功すれば、それはひとえに今回の選考手法を考案された選考委員会と教授会の業績でありましょう。しかし、もし期待外れに終わってしまったならば、お膳立てを整えて頂いたにもかかわらず、それを活かせなかった私に全責任があります。全国的にみて大学の総合診療部は必ずしも期待通りに機能しているところばかりではなく、むしろその舵取りは難しいというのが共通の認識となっておりますが、千葉大では是が非でも成功させる覚悟で取り組むつもりです。

大学総合診療部の成功への第一ステップは、総合診療医の育成にあると考えております。私自身は東京女子医大にて卒後研修を行い、神経内科に入局し、一専門医として生きて行くつもりでしたが、結婚を期に一般医としての継承開業が現実的なものとなりました。神経内科学は興味深い専門分野でしたので、当初、ジェネラルな医療に向かうことには抵抗があったのですが、食わず嫌いは良くないと思いい、アイオワ大学家庭医療科への臨床留学などの試行

錯誤を繰り返しているうちに、この分野の魅力に取り憑かれたという経緯があります。この経験から、総合診療にやり甲斐を見いだすためには、他の専門分野と同じく、研鑽を重ねてその領域の独自性を知ることが重要だと感じました。米国で学んだ研修プログラムを日本風にアレンジし、誇りを持てる総合診療医を一人でも多く育てて行きたいと思っております。

第二のステップは、ブライマリアケア医に直接還元できるリサーチを積み重ねていくことです。3月1日の着任日に日本総合診療医学会にて生坂医院のレジデント(現当部医員)が発表した、一般外来での頭痛の問診の有用性に関する演題で日野原賞を頂き、幸先良いスタートを切れたと思っております。

第三のステップは、研修登録医制度を利用した実地医家のための生涯教育プログラムの立ち上げと、それを核とした病診連携の強化があげられます。そして最後に、学内外の各専門科の先生方に感謝し感謝される存在になることです。総合診療はその定義が曖昧なために、齟齬を生じやすい部門と言われますが、これを防ぐために各診療科との連携を密に運営していくことが総合診療部の成功には欠かせません。

昨年、開業した頃には、再び大学に籍を置くなどとは夢にも思わなかったのですが、周囲の方の声援と、後輩たちからのもう一度大学に戻って指導をして欲しいという声に後押しされ、また天下の千葉大でやれるのであればこの思いで今回のご推薦を有り難くお受け

しました。一開業医に総合診療部の運命を託して頂いた千葉大の英断に恥じることのない結果を出すべく、今後の人生をかけて挑戦し続ける所存ですので、皆様方からのご支援を是非お願い申し上げます。蛇足ながら、アメリカから帰ったら一緒に開業するという妻との約束がさらに延びてしまい、家では益々頭が上がりなくなりました。

限りある地球上の資源と、一生という時間の制約の中で(医療に関与する者にとつて)「しあわせ」をヒトの目標と考えるとき、「合理化」と「経済性」の相関は高値でしょうが決して等価とは考えません。企業は経済性を第一主義に追求しても存在価値はありますが、学府は経済性のみではないかと思えます。アカデミアは真理・科学の探求・学問の普及が天命と考え、科学のヒトへの還元すなわち民生化なくして存在意味は乏しくなります。この時勢の中で、学府としては合理化することにより時代の流れに出来る事が出来ると考えます。

「脳機能計測解析研究部門」では、QOLの向上のために、信頼性・侵襲度・経済性をモットーに、脳の機能の医療の向上に参加できれば幸いです。偉大な先輩達の古典神経学と、近代的な脳機能検査法を有機的に組み合わせ、脳とこころの両面からアプローチし、新しい非侵襲的脳機能計測法の開発研究と解析法研究に取り組む決意です。医療の質の向上に貢献でき、高額医療を是正するために、脳機能障害の予防・早期診断・早期治療・早期機能回復ならびに機能維持・生活補助具開発を推進し、全人的な在宅医療・看護を視野に入れた民生機器から、高度先端医療機器までを包括したセンターを目指します。現場の先輩・後輩のお力添え無くは成り立たない施設です。地域医療の最前線でご活躍の開業医・診療所から病院までのあらゆる層からの参画をお願いいたします。院生・研修医・医員か

フロンティアメディカル工学研究開発センター
脳機能計測解析研究部門



下山 一郎 (昭48)

フロンティアメディカル工学研究開発センター
手術・生体機能支援機器研究部門



五十嵐 辰 男 (昭52)

学長・工学部長・医学研究院長・病院長の多大なご尽力により本センターが2003年4月より開所されました。ありがとうございます。その存在意義・真価が問われるのはこれからです。本センターを位置付けるべく任務の重大さに身の引き締まる思いです。時の流れが加速し、促成栽培がもたらされる昨今、息の長いセン

ターになるように尽力する所存です。「医用工学」本来ならば、ヒトにかかわるすべての学部・分野からの参加が理想ですが、種々の制約を受けてスタートせざるを得ないのが現実です。学問も免罪符とならず、自由競争原理のもとに構造改革の大潮流の真っ只中、時代の要望に応じ、境界領域・学部間の溝を埋めるべく、合理的・有機的に組み合わせ、三宅洋一工学部教授をセンター長に、整形外科守屋教授と民間企業役員を副センター長に、工学部・理学部・医学部・複数の企業から立ち上げさせていただきました。

この度、4月1日付でフロンティアメディカル工学研究開発センター、手術・生体機能支援機器研究部門を担当させていただくことになりました。大任を仰せつかり身が引き締まる思いです。また多くの先生方には一方ならぬお世話になり、誌面をお借りして心より感

謝申し上げます。私は昭和52年に本学卒業後泌尿器科に入局し、昭和57年以来済生会宇都宮病院、旭中央病院で診療に携わり、遺伝子機能病態学教授、伊藤晴夫先生、泌尿器科学教室前教授、島崎淳先生、現旭中央病院長、村上信乃先生のご指導の下に、主に癌と結石治療に関して臨床研究に励んでまいりました。その間に泌尿器科では尿路結石治療分野で内視鏡治療、体外衝撃波碎石術のような技術革新の波が起り、

分野の諸氏方々の参加を、この場をお借りしてお願い申し上げます。臨牀生理学「ヒトの生きる(=機能)理由の学問」の分野で、神経系に關与したと、診断・治療・予後リハビリ用品・あれば便利な機器など医療用器械・解析結果についての疑問など大歓迎いたします。神経系以外でも他部門との連携を密に検討考慮させていただきます。ご批判・ご要望・ご意見を ichino@faculty.chiba-u.jp まじり一報お願ひ申し上げます。

院群臨床研修プロジェクトの中で管理型病院として位置づけられています。各千葉県立病院の特色を生かした研修構想に基づき、若手医師の教育と養成という大きな仕事が始まります。

研究局は小規模ながらもこの数年でその成果は確実に上がってきており、全国の医学部大学院生等約20名

が研修生として加わり日夜を分かたず研究が展開されています。近年は、遺伝子関連の特許出願は10数件を数え、これらの成果を一日も早く臨床応用するため、産官間での共同研究を積極的に推し進めております。

一方で、当センターが実務を担当している業務に「がん登録」があります。千葉

県内のがん患者の動態を正確に把握することが、がん対策に必須であることは言うまでもありません。この場を借りて、あのはな同窓会諸兄弟のがん登録への協力をお願い致します。

最後になりましたが、私は昭和39年に千葉大学医学部を卒業、一年間のインターン生活を経て、第一生化学

教室で大学院を終了後、マサチューセッツ工科大学生物理学部に留学しております。3年半経ったところで、オイルショック前で千葉県の抱く大きながん対策計画に惹かれて、当センターに帰ってきて以来30年が経ちました。研究の現場にある時も、科学情報の社会への説明責任と還元を重視して

きましたものとして、がんの個性をより早く正確に診断し、個々の患者さんに最適ながん治療を選択するテーラーメイド医療の実現に向けて努力して参りたいと考えておりますので、同窓の皆様のご理解とご支援を引き続きお願い申し上げます。

極めてすぐれているとしてその学風について称賛して居りました。元来千葉大学には臨床を重視する伝統があることは内外によく知られて居りますが、それを基本にした上で、松本教授が私共に研究業績を重ねるようにと叱咤激励されたことが思い出されます。それは教育研究機関において活躍し競争に勝たねばとご指導であったと追想して居ります。

先生の卒寿の祝賀会の際は、現役当時の先生と少しも変らず豊饒として居られ、大へんお元気で私共にお話をして下さいましたし、またあのはな同窓会報2002年5月15日(124号)に名誉教授近況(第二の人生)をご執筆になって居りましたが、もはや先生のご温顔に接することが出来なくなつたことは痛恨の極みでございます。

先生から賜つたご指導に感謝致し、謹んでご冥福をお祈り致します。

千葉大学名誉教授 故松本胖先生を偲んで

小泉 準 三 (昭30)



12年11月千葉医科大学助手(精神病学教室)、昭和16年8月に講師に昇任されましたが、翌9月に応召され、昭和19年9月に召集解除となり翌10月に帰学されました。

昭和24年8月千葉大学千葉医科大学附属医学専門部教授、翌25年10月千葉大学千葉医科大学助教授、昭和28年4月千葉大学助教授、昭和30年1月厚生技官として国立国府台病院第一精神科医長としてご出向、昭和31年6月に医学博士の学位を授与され、昭和36年10月荒木直躬教授の後任として千葉大学教授(医学部)にご就任されました。

昭和52年5月に停年によりご退官される迄の間に、学内においては昭和42年に医学部附属病院長、昭和45年に医学部長、昭和50年に看護学部長、学外においては厚生省と文部省関係では昭和43年に国立大病院長会議常置委員長、昭和46年に全国医学部長病院長会議会長等の重責を果たされ、その他学会、医師会、千葉県等の多くの各種の委員としてご活躍され、大学の内外で広汎な領域において指導的役割を果たされ、多大なる貢献をされました。このようなご功績により昭和52年6月14日に千葉大学名誉教授の称号を、そして昭和57年11月3日に勲二等瑞章章を授与されました。

先生のご尊父千葉大学名誉教授松本高三郎先生は大正12年4月から大正13年3月迄千葉医科大学附属病院長、大正13年12月から昭和

4年8月迄千葉医科大学長に就任され、そして精神病学講座の初代教授として、精神病学教室、神経精神医学教室、そして現在の精神医学教室の基礎を築かれました。このように私共がご指導を賜つたこの伝統ある教室には初代の松本高三郎先生、四代の松本胖先生の血が受け継がれていると言っても過言ではないと思われ

ます。

松本胖先生が昭和36年に教授にご就任の時、私は助手でした。ご就任にあつて先生は、精神医学の巾広い研究領域即ち精神病理学、神経病理学、神経生理学、神経化学、精神薬理学、社会精神医学等の研究を教室員夫々の個人が志向する方法論により自由に専攻させると言う基本的な方針を教室員に示されました。そして夫々の研究成果は必ず

千葉大学名誉教授松本胖先生は、平成15年1月20日急性心不全のためご逝去されました。享年92歳でした。先生は明治43年7月5日東京市でお生れになりました。旧制甲南高等学校理科乙類を経て、昭和10年3月千葉医科大学を卒業になり、同年19日千葉医科大学助手(精神病学教室)にご就任、同年28日に医籍登録、同年4月千葉医科大学附属医院脳病科医院助手、昭和

昭和24年8月千葉大学千葉医科大学附属医学専門部教授、翌25年10月千葉大学千葉医科大学助教授、昭和28年4月千葉大学助教授、昭和30年1月厚生技官として国立国府台病院第一精神科医長としてご出向、昭和31年6月に医学博士の学位を授与され、昭和36年10月荒木直躬教授の後任として千葉大学教授(医学部)にご就任されました。

昭和52年5月に停年によりご退官される迄の間に、学内においては昭和42年に医学部附属病院長、昭和45年に医学部長、昭和50年に看護学部長、学外においては厚生省と文部省関係では昭和43年に国立大病院長会議常置委員長、昭和46年に全国医学部長病院長会議会長等の重責を果たされ、その他学会、医師会、千葉県等の多くの各種の委員としてご活躍され、大学の内外で広汎な領域において指導的役割を果たされ、多大なる貢献をされました。このようなご功績により昭和52年6月14日に千葉大学名誉教授の称号を、そして昭和57年11月3日に勲二等瑞章章を授与されました。

先生のご尊父千葉大学名誉教授松本高三郎先生は大正12年4月から大正13年3月迄千葉医科大学附属病院長、大正13年12月から昭和

私は先生のご推薦により昭和50年に筑波大学へ赴任致しました。筑波大学の創設にあつて千葉大学からは教授、助教授、講師等の多くの教官が転任し、新構想大学の基礎づくりに参画致しました。その頃他大学から転任した筑波大学の内科科学教授が「千葉大学はどうしてこのような立派な土壌を持っているのだろうか」と我が千葉大学から赴任した教官のとくに臨床能力が

極めてすぐれているとしてその学風について称賛して居りました。元来千葉大学には臨床を重視する伝統があることは内外によく知られて居りますが、それを基本にした上で、松本教授が私共に研究業績を重ねるようにと叱咤激励されたことが思い出されます。それは教育研究機関において活躍し競争に勝たねばとご指導であったと追想して居ります。

先生の卒寿の祝賀会の際は、現役当時の先生と少しも変らず豊饒として居られ、大へんお元気で私共にお話をして下さいましたし、またあのはな同窓会報2002年5月15日(124号)に名誉教授近況(第二の人生)をご執筆になって居りましたが、もはや先生のご温顔に接することが出来なくなつたことは痛恨の極みでございます。

先生から賜つたご指導に感謝致し、謹んでご冥福をお祈り致します。

奥田邦雄先生を偲んで



本学第一内科奥田邦雄名誉教授は去る平成15年2月

野村 文 夫 (昭50)

2日急逝されました。その前日から東京で開催されていた「肝血流動態イメージ研究会」にコメントーターとして参加され、いつもの様に活発にご発言されたその晩のことでした。あまりに突然のことで、未だに信じられず、第一内科の

名誉教授室について足が向いてしまう私です。

奥田先生は大正10年5月21日東京にお生まれになり、昭和19年9月満州医科大学を首席で卒業、終戦直後の昭和20年9月から国立千葉病院内科にご勤務しに臨床と研究の道に入られ、学位取得の後、昭和26年9月、山口県立医科大学第一内科講師に転出され、2年後には32歳の若さで助教授に昇任されました。昭和28年から31年にかけて、フルブライト奨学生として米国の名門 Johns Hopkins 大学に内科・生化学フェローとして御留学。2年おいて再び同大学に赴かれ、生化学助教授として昭和35年まで研究生活を続けられ、主としてビタミンB12に関する研究で数々の御業績をあげられました。2度目の渡米に際しては、米国永住も考えられたそう、奥田先生のベストセラーの一つである医学英語の書き方(第5版まで)(医学書院)は日本への感謝と惜別の意を込めて書かれたものだと伺ったことがあります。その後、昭和38年5月、久留米大学医学部第二内科教授にご就任され、さらに昭和46年4月には千葉大学第一内科の教授として再び千葉の地に

おいでになりました。その後も肝臓病学、ビタミン学において数多くのご業績をあげられ、英文論文(原著および総説)540編、英文の御著書は12点にも上ります。肝臓病学の分野では特に、特発性門脈圧亢進症、肝細胞癌の領域では常に世界をリードするお仕事を展開され、国内学会はもとより、

第6回国際肝臓学会、第2回アジア・太平洋肝臓学会などの国際学会の会長も務められ、世界の肝臓病学・消化器病学の発展のため多大なご貢献をされました。また教育にも情熱を注がれ、山口大学、久留米大学、千葉大学において多数の門下生を育成されました。昭和62年3月、千葉大学を定年ご退官、名誉教授となられました。その activity はご退官前と変わることなく、ご退官後の業績を集められた膨大なご業績集を出版されたことはご存知の方も多いと思います。また、Hepatology の Associate Editor、Journal of Gastroenterology and Hepatology の Chief Editor としても長年ご活躍されました。これらの御功績により、平成2年には米國肝臓学会最高功労賞、平成8年には勲三等旭日中綬賞

の叙勲、そして平成10年には世界の消化器癌患者にとって最高の栄誉である B. P. 賞を授与されました。このように多くの受賞に輝く奥田先生ですが、昨年のアジア・太平洋肝臓学会において Okuda Lectureship が創設されたことを殊のほかお喜びの様子でした。

奥田先生は常にご自分のお力で道を切り拓かれてきたご経験から、「〇〇大学出身だからとか、△△の弟子だからと言って外国では通用しない。その人個人の力でしか勝負できない」と常々言われていました。私など未だに、「私は奥田門下ですから(学問の厳しさはわかっているつもりです。)」などと言ってしまうが、先生は何事にも興味を持たれ、しかも徹底的になさる方で、現役時代からのご趣味であったバイオリン演奏にご退官後には本格的に取り組まれ、千葉市のオーケストラにも所属されていきました。文字通り生涯現役を貫かれた先生には現在投稿中の英文筆頭原著論文が数編あり、その revision を共著者の門下の方々やご息が担当されていて、あらためて先生は永遠に現役という感を強く致します。奥田先

生、長い間の数々のご指導ありがとうございました。門下生一同、先生に教えて頂いた事をしっかりと受け止め、そして先生の思い出

附属病院の今後の課題

前病院長 伊藤 晴夫 (昭39)

を大切にしながら、それぞれの道で精進する所存です。どうかお見守り頂きたいと存じます。

皆様のご指導を仰ぎながら、本年3月末まで2年間、附属病院長を務めさせて頂きました。この2年間は大学の法人化や医療制度改革が本格化した時期ですので、苦難な時代の始まりでもありました。このような背景もあり、また教職員の皆様のご協力により、予想以上の仕事が出来ました。例えば、(1)附属病院増築は国よりの認可が下り、間もなく工事が始まります。患者様のアメニティー向上、狭さの解消など附属病院の発展にとつてのメリットは計り知れないものがあると思えます。(2)診療科の再編は附属病院・医学部の了承がとれ、これから実行です。(3)文字通りの生涯現役を貫かれた先生には現在投稿中の英文筆頭原著論文が数編あり、その revision を共著者の門下の方々やご息が担当されていて、あらためて先生は永遠に現役という感を強く致します。奥田先

この他、多くの進歩が見られました。これも偏に皆様方のご指導・ご支援のたまものと思えます。さらに、事務部の改組、専門職員の確保、能力評価などの事務組織の改革は今後の大きな問題です。しかし、何とい

既存のスペースの見直しを行い31台分増設しました。秋谷の整備とともに、その一部に約60台分の駐車場を確保することになりました。(4)医療情報部から企画情報部への変更は病院経営の基本として極めて重要になると思えます。これは未だ院内措置の段階ですが、ここで正確な情報が取れるようになることが期待されます。ドイツの大学では各診療科あるいは個人一人一人の成績がリアルタイムで分かるので、病院全体の経営責任が各科あるいは各人に分担され、成果が上がっているそうです。(5)保育所「さつき園」が設置されることになりました。ここでは病児保育を行う予定です。育児をしながら働く女性にとって役立つと思います。(6)クラークの導入は未だ一部のみですが、強い反対を押し切って始めたことは間違っていないかと思えます。

院が巨額な赤字を出して千葉大学全体の財政を圧迫するのではないかと危惧を抱いている他部局の方もいます。しかし、附属病院は大学全体の約半分の財政規模を有しており、地域に対して大きな影響力を有していることに対して敬意を示してくれる方々は多いようです。このように、研究や教育はさておき、経営面だけを見ても、千葉大学の将来は医学部・附属病院にかかっていると、いっても過言ではありません。附属病院における日常診療を全国最高レベルに維持し、これを基に先端医療に取り組み姿勢が求められます。また、基礎教室の研究者は出来れば臨床に直結するような研究を行ない、臨床教室から多数の研究者を受け入れるよう

国立大学病院長会議の常置委員長としては、変革の時代を迎えて多くのプロジェクトに関わることが出来ました。例えば、「医療事故防止のための安全管理体制の確立に向けて(提言)」、国立大学附属病院卒後臨床研修必修化へ向けての指針、「国立大学法人化後の国立大学附属病院の運営について」、「国立大学附属病院の医療提供機能強化を目指したマネジメント改革」などをまとめ、発刊することが出来ました。今後の附属病院にとっての課題は何でしょうか。大学法人化は最大の問題だと思います。これを積極的にさならなる発展へのチャンスと捕らえるべきです。附属病

材料部、EBCセンターなどに所属する医療技術職員を一元的に診療支援部(仮称)として組織することにより必要に応じて人材の配置あるいは適正配置が可能となると思います。

これらのこと以上に重要なことは、医療提供機能に關して大学主体という考えから地域医療の一端を担い、この水準を高めてゆくことに協力するという考えに変わることだと考えます。日本の人口の約1/20を占める千葉県全体で考えると病床数、医師数、看護師数すべてで全国平均を大幅に下回っています。千葉県立病院を中心とした将来構想が千葉県健康福祉部で検討されています。附属病院は今後、国立病院・民間病院や大学病院なども含めた地域の医療水準をあげるために積極的にイニシアティブをとってゆくべきと考えます。卒業臨床研修もこのような地域医療問題と密接に關わりを持っていくと思います。また、地域医療に關しては、附属病院で導入される電子カルテを県内の病院・診療所と共有することも考えるべきです。医療の効率化、医療のレベルアップなどを通して患者様のためになると思います。

以上、取り留めのない文で恐縮ですが病院長離任に際して感じたことを述べさせていただきます。なお最近、原稿依頼やインタビューを受け、2-3の雑誌などに小生の考えを発表させて

同窓会員著書の紹介

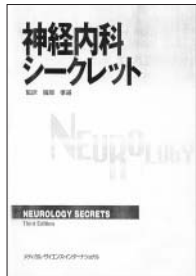
服部 孝道 監訳

Rolak L. A 編著

「神経内科シークレット」

メディカル・サイエンス・インターナショナル

服部 孝道(昭42)



医学は常に進歩発展しているため、医師たるものは生涯学習を続けることを義務づけられた大変な職業である。以前になにかで読んだことがあるが、一通り専門分野の医学文献に目を通すには、最低1日30時間は読書時間が必要であるらしい。もちろんそれは不可能なことでも勉強のために費やすことのできる時間は限られており、そのために効率の良い勉強法が望まれる。

理想的な勉強法は、ソクラテス流教育とよばれる、

頂きました。参考にして頂ければ幸いです(新医療2003年4月号、74-76頁、月刊医療情報 2003年1月号、14頁、Jamic Journal 2003年2月号、12-14頁)。

教師との質疑応答であるらしい。疑問点を直接専門家に聞くだけでなく、専門家からも重要と思われることを質問される方法で、欧米ではよく使われる教育方法のようで、著者もかつて英国と米国で臨床教育を受けた際に、この教育法を使われたことを思い出す。

しかし、神経内科はそのカバーする範囲は広く、脳血管障害、神経腫瘍、痴呆、脱髄疾患、頭痛、てんかん、失語・失行・失認、大脳基底核疾患、小脳疾患、脳幹疾患、脊髄症、自律神経疾患、末梢神経疾患、神経筋接合部疾患、ミオパチーなどの分野に分かれ、それぞれに専門家がいますので、各

専門家から直接指導を受けることは全く不可能である。

この本は題名から想像することはできにくいですが、ソクラテス流教育法で書かれたすばらしい教科書である。内容は、神経内科学を30の分野に分け、それぞれの専門家が質問と答えを書いている。質問項目は全部で1826問もあり、通常の教科書に書かれてない範囲までカバーされており、質問とその答えという設定で焦点がはつきりし、答えが簡潔で理解しやすい。従って、読みたいところを読むという方法で、効率の良い勉強ができる。教科書ともいえる。

翻訳は教室の大学院生と大学院を修了してまもない若い仲間10名によって行われ、監訳者としていねいに目を通し、読者の理解を助けるため訳注を多く設け、図の追加も行った。

神経内科に關心のある同窓の諸兄にぜひご一読を勧めたいと思う。

人事異動

教授就任

法医学

岩瀬博太郎(東大平5)

(東京大学大学院医学系研究科助教授より)

視覚病態学

山本 修一(昭58)

(東邦大学医学部附属 佐倉病院教授より)

形態形成学

年森 清隆(熊本大昭50)

(宮崎医科大学)

医学部教授より)

光学医療診療部

神津 照雄(昭44)

(同助教授より)

総合診療部

生坂 政臣(鳥取大昭60)

(医療法人生坂病院より)

助教授昇任

基質代謝治療学

宇谷 厚志(京大昭57)

(皮膚科講師より)

整形外科

高橋 和久(昭51)

(同講師より)

精神医学

橋本 謙二(九大薬昭57)

(同講師より)

胸部外科学

斎藤 幸雄(昭57)

(同講師より)

先端応用外科学

小林 進(昭54)

(同講師より)

講師昇任

神経病態学

柳原 隆次(旭医大昭59)

(同助手より)

精神医学

清水 栄司(平2)

(同助手より)

整形外科

原田 義忠(昭57)

(同助手より)

第二内科 西村 美樹(昭61)

(同助手より)

皮膚科

小林 孝志(慶応大昭62)

(基礎代謝治療学助手より)

(基礎代謝治療学)

第一内科 山口 武人(昭56)

(同助手より)

感染症管理治療部

猪狩 英俊(昭63)

(同助手より)

千葉大学フロンティアメ

ディカル工学研究開発センター

助教授昇任

脳機能計測解析研究部門

下山 一郎(昭48)

(神経情報統合生理学 助教授より)

手術・生体機能支援機器研究部門

五十嵐辰男(昭52)

(泌尿器科腫瘍重粒子線 治療学助教授より)

生体ナノ機能材料研究部門

龍岡 穂積(昭54)

(神経生物学助教授より)

助教授昇任

生体ナノ機能材料研究部門

林 秀樹(昭60)

(先端応用外科学助手より)

手術・生体機能支援機器研究部門

牧野 治文(杏林大昭63)

(第二外科助手より)

他大学

助教授昇任

繁田 達也(昭55)

雨宮 邦彦(昭51)

星野 豊(昭42)

澁谷 光柱(昭39)

沖津茂次郎(昭39)

霜鳥 政光(昭38)

おくやみ

昭和大学 形成外科学教室員外 佐藤 兼重(昭51) (同助教授より)

松本 胖(昭10)

杉田 歌子(帝女医昭10)

佐藤 譲(昭12)

千代倉俊夫(昭15)

小川 直(昭16)

松永 幹(昭17)

岡田正次郎(昭17)

石川 清(昭19)

関 秀一(昭19)

奥田 邦雄(満医大昭19)

小倉 光一(昭20)

横井 鍾爾(昭20)

清川 八郎(昭20)

興村 圭一(昭21)

大坊 喜一(昭21)

高村 良平(昭23)

菊山 勤(昭24)

中村 重徳(昭25)

山崎 芳久(昭25)

蔵石 光夫(昭28)

関口 俊輔(昭35)

井村 价雄(昭37)

西沢 直(昭37)

板橋光司郎(昭38)

霜鳥 政光(昭38)

沖津茂次郎(昭39)

澁谷 光柱(昭39)

星野 豊(昭42)

雨宮 邦彦(昭51)

繁田 達也(昭55)

随 想

羽里彦左衛門先生の
想い出とリケッチアの研究回想

桑 田 次 男 (昭19)

私が旧千葉医科大学に入
学した昭和16年(1941年)の
9月、東大附属伝染病研究
所、通称伝研から羽里助教
授が細菌学講座の教授とし
て着任された。それは前任
の初代緒方規雄教授が定年
を待たずに同年6月に辞任
されたからであった。私は
当時から細菌学に特別の興
味を持ち始めていたので、
彦左衛門という古典的な名
前をお持ちのどのような教
授が来任されるか強い関心
を持って待ち受けていた。

先生が来任されて最初の時
間、先生は当時第一級の細
菌学、免疫学の本であった
イギリスの Topley & Wilson
の著書を小脇に抱えて



恩師 羽里彦左衛門先生 (1949年)

の細菌学教室では初代の緒
方規雄教授とその門下の方々
によって、日本の風土病で
あった恙虫病の病因を明ら
かにする研究が他大学と競っ
て行われて来た。秋田の雄
物川流域で感染した恙虫病
患者の血液をウサギの臍丸
に接種することによって病
原体を二株分離し、その継
代に成功された。昭和4年
には緒方、海野は年余にわ
たつて継代されて来た病原
感染ウサギの臍丸の組織球
内にリケッチア様微生物を
コンスタントに検出し、

「本微生物を以て恙虫病病
原体に擬せんとす」と記載
した(1)。この病原体は
後に Rickettsia tsutsugami
Hushi (Hayashi) Ogata
と命名された(紙面の都合
で命名問題の詳細は省略)。
このリケッチア株は細菌学
教室にウサギで更に継代、
保存されていた。

恙虫病やロッキー山紅斑
熱の病原リケッチアについ
ての実験は緒方教授以来教
室から少し離れた松林の中
の所謂ペスト室で行われて
来た。何故ならそれは実験
室内感染を伴ったからであ
った(教室では既に3名の犠
牲者が出ていた)。ペスト
室には狭い実験室が4室、
実験動物室一、それにタイ
ル張りの浴室がついていた。

羽里先生は実験家であった。
そのペスト室で着任以来技
術員の深山と共に自らマウ
スやウサギを用いて「リケッ
チアの免疫に関する実験的
研究」に取り組まれた。そ
れは恙虫病の予防ワクチン
の開発を目指すものであつ
た(2)。

当時私は解剖の故鈴木重
武先生の主催されていたあ
る学生グループの班の一員
として、鈴木先生の斡旋で
羽里先生に紹介され、以後
先生のリケッチアについて
の実験の一部をペスト室で
お手伝いするようになった。
ペスト室の周囲は草むらで
あったため実験に用いたマ
ウスの容器の蓋を取った所
ある時マウスを丸飲みした
蛇がとぐろを巻いていた事
などもあった。他方教室の
先輩は羽里先生の別の研究
テーマであったチフス性疾
患の免疫にかかわる問題に
従事されていた。

私は昭和19年9月、戦時
中のため6ヶ月早く卒業し、
迷うことなく羽里先生の主
催された細菌学教室に参加
し10月には助手に任命され、
引き続き恙虫病リケッチア
の実験に従事した。昭和20
年敗戦の2ヶ月前に千葉市
はアメリカ空軍の大空襲を
うけ、市の大半は戦災を蒙
り大学の基礎教室も戦災を

免れることは出来なかった。
当時けやきの美しい並木を
中心に左右に独立していた
基礎医学の各教室はいずれ
も焼夷弾の被害を受けた。
細菌学教室も教授室と図書
室を残したのみで研究室は
すべて焼失してしまつたが、
幸いペスト室は何ら被害を
うけなかった。その時私は
相模原の陸軍電信隊に軍医
として勤務しており、敗戦
後部隊は解散し9月1日に
は早くも大学に復帰するこ
とが出来たのは幸いであつ
た。大学に帰還時の私の感
概は次のようであつた。

戦いに破れたれどもこの
国に
山河残り希望は捨てず
焼跡に石の土台のみ残り
いて
研究室なし敗戦九月
苦しかりし戦い終り再び
を
医学の道に戻るよろこび
一歌集『るのほな』より

戦後の混乱期の日本にあつ
て、それまでは見られなかつ
た発疹チフスの大流行が国
内で発生した。わが教室は
恙虫病リケッチアの孵化鶏
卵卵黄囊内培養(3)につ
いての先駆的経験を有し、

発疹チフスの病原リケッチ
アの分離と研究を開始して
いた。そのため厚生省から
の委嘱をうけ、昭和21年11
月より Cox-Craigie 型の
発疹チフスワクチンの製造
に着手した。それは羽里先
生を中心として細菌学教室
の総力をあげての仕事であつ
た。そのためには大量の受
精卵を収める孵卵器を必要
としたので、佐倉市の民間
業者の孵卵場の設備を借り
て、教室員全員が千葉から
佐倉まで出張して作業を遂
行した。作業は翌22年の2
月まで持続された。最終的
に精製してワクチンとして
提出するまでの作業は大学
のペスト室で行われ、厚生
省から求められた所定の量
の発疹チフスワクチンは無
事に提出されたのであつた。
この件、その他については
且て「千葉大学医学部85年
史」にも私が寄稿したので
参照されたい。羽里先生は
寡黙にして寛容、そのお人
柄の故に困難なワクチンの
製造時にも教室全員が一致
して協力を惜しまなかった。

昭和22年の春には当時有
楽町にあった在日アメリカ
軍の「四〇六総合医学研究
所」から厚生省を介して、
大学に細菌学の研究者の採
用の要請があつた。その謳
い文句は「居ながらにして

アメリカ医学の粋を学び」
とあつた。当時は外国から
の文献の輸入は全くなかつ
たので私は羽里先生の推薦
を受けて応募し、4月から
同研究所のウイルス・リケッ
チア部に出張することとなつ
た(4)。同部にはアメリカ
人の部長と職員に加えて
東大、京大からの研究員も
日本脳炎のウイルスについ
ての研究に従事しておられ
た。私は始め国内に流行し
ていた発疹チフスの血清診
断のための補体結合反応を
行ない、乾燥補体の使用に
驚いたりした。次いで私が
恙虫病リケッチアを取り扱つ
た経験を持っていたので新
潟で発生した住民の患者の
血液からのリケッチアの分
離を依頼された。その結果
病原性の異なる恙虫病リケッ
チア数株をマウスを用いて
分離することに成功した。
それらの株を用いた恙虫病
の免疫については実験を後
日行ってアメリカの「
Immunol」に投稿し発表す
ることが出来た(5)。

次いで、昭和23年の秋に
は富士山麓の旧日本陸軍の
演習場で演習に従事してい
た在日アメリカ軍の兵士の
間に恙虫病を思わせる症状
の患者が発生した。当時ま
で恙虫病は秋田、山形、新
潟の大河の流域でのみ発生

すると報告されていたので、富士山麓で発生した疾病が果して恙虫病かどうかが問題であった。私は研究所のバギー部長と共にジープで現地を訪ね、恙虫病の媒介者であるダニ *Trombicula sp.* が生息しているかどうかを調べた。その結果、タテツツガムシの存在を確認し得た。それに加えて新種のダニを発見、同定しフジツツガムシ、*Trombicula fujii* と命名した。

この新種についてはハミルトンにあるアメリカNIHのロッキー山研究所の副所長であったフィリップ博士のご援助を受けて発表することが出来た(6)。

- た。
- 文 献
- (1) 緒方規雄、海野幸胤：恙虫病々毒の家兎睾丸接種に依る移植並に其組織内に出現する微生物に就て：千葉医学会雑誌7、1215-1222(1929)
 - (2) 羽里彦左衛門、西村敏而、桑田次男：リケッチア病の免疫に関する実験的研究(第1報) 日本細菌学雑誌1、61-65(194)
 - (3) 羽里彦左衛門、桑田次男：リケッチア病の免疫に関する研究(第2報) 日本細菌学雑誌1、66-71(194)
 - (4) 桑田次男：恙虫病研究の新しい歩み 日本細菌学雑誌4、1-13(194)
 - (5) Kuwata, T.: Analysis of immunity in experimental Tsutsugamushi disease. J. Immunol. 68, 115-120(1952)
 - (6) Kuwata, T., Berge, T. O. & Phillip, C. B.: A new species of Japanese larval mite from a new focus of Tsutsugamushi disease in southeastern Honshu of Japan. J. Parasit. 36, 80-83(1950)

あのはな同窓会
への春附

昭和28卒クラス会 十万円



昭和28年卒業同窓会 (昭28卒)

昭和28年千葉大学医学部卒業生は本年度卒後50周年に当り、去る3月15日(土)サンガーデンホテル千葉で同窓会を開催した。5年ぶりの集会で、遠方から黄君(八戸)、熊谷君(須坂)、望月君(静岡)、鈴木正己君(富士)等39名が出席した。同級生94名中28名は死亡している。開会に先だっ



て死亡者に黙祷をして冥福を祈った。出席者全員に近況報告をして貰い、往時を思い出した。同級生は殆ど70歳なかばになり、なお元気で第一線で活躍されている者もあるが、何等かの疾患で外出を控えている人も多い。

久しぶりの集会であのはな台を散策したという方もあり、話題も多く、盛会であった。二次会の席にも多数集まり午後9時頃再会を約束して閉会となった。なお卒業後50周年を記念して、あのはな同窓会ならびに猪之鼻奨学会への各拾万円ずつ計式拾万円を寄贈した。同日参会した者は寄せ書きの通りである。

(奥井勝二)



三一會 (昭31卒)

昨秋、平成14年10月19日(土)夕、われらが昭三一會は、帝国ホテル本館4階松の間にて開催された。今回の出席者は、級友35名、奥様7名、客人1名(習志野寮で一緒に32年卒の佐々木邦幸君)の都合43名の多数となった。なかでも、中沢君が会頭として主催する日本公衆衛生学会などで講演されるため、米国より来日、また、療養中の志村君



成瀬君は車椅子で、徳山君も喘息治療中で、ご三方奥様ご同伴での参加であった。開会後、昨年3月に亡くなった関 博人君に黙祷を捧げた。小野世話人より、この一年間の経過報告があり、その後、中沢君の音頭で乾杯となった。

宴会が始まり、会食の間に、各人からそれぞれ近況報告があった。外国旅行や趣味の話、退職後の仕事の話に耳を傾けた。また、皆70歳を越えた現在、なんらかの疾病に悩まされている人も多くなり、自らの病気の話や闘病体験談にうなずいた。一方、将来の計画、といつてもわれわれの人生は最終ラウンドに入っているわけであるが、最後まで希望をもって、



意欲的に人生を楽しもうという気持ちを持つ人もいます。いろいろと人生論などでもて、和気藹々のうちに幕を閉じた。

次回の幹事は、船橋君と山野君に決まり、来年の再会を約して、まさに「一期一会」ともいえるこの会を終了した。

出席者：上原すゞ子、海老原雄一、遠藤光夫、小川道一、小沢 彊、小野清四郎*、加藤繁夫、蟹沢成好、北川定謙*、桑原久、香田真一、五味淵諒一*、志村公男*、白井敏雄*、杉山伸子、関光倫、関山明美、高野昇、高橋 啓、辻 輝蔵、徳山輝男*、中沢 弘、成瀬基次郎*、西沢 護、西原源太郎、船橋 茂、松丸信太郎、水岡慶二、森 博志、森 碧、山口慶三、山崎 武、山野

元、井幡 宏、川上秀一。
*印はご夫婦。
(幹事 井幡 宏、川上秀一・記)

昭和37年

平成14年7月6日(土)の七夕・イブに、卒後40周年記念クラス会を東京帝国ホテル・松の間で47名の参加をえて開催した。(当日、青森の福士君が、欠航のため急遽欠席となった。)10名の物故者に黙祷を捧げ、出席者全員のスピーチを披露、来し方行く末を語り合い、医師人生40年のいろいろ



ろに時間の過ぎるのを忘れた。語り尽くせない20名は2次会の17Fレインボールムで、都心の夜景を眺め、談論風発。次期幹事は静岡県勢の担当で行い再会を約し散会した。遠慮ないクラスメイトはいいものですね。出席者(敬称略)：安達恵美子、井坂誠二、石山淳一、伊東治武、伊藤文雄、井村价雄、入枝幸三郎、岩倉弘毅、大野孝則、大原啓介、岡崎伸生、奥山隆保、勝田貞夫、黒岩璋光、小林総介、砂倉瑞良、穴倉正胤、嶋田文之、將基面誠、#杉岡昌明、瀬川 襄、高梨健治、高柳博海、#田島誠、土井 修、十林健児、#中野泰雄、中村嘉孝、中山博司、伯野中彦、#原田康行、#日浦利明、布施吉弘、堀口東司、本多満、松江寛人、満野博幸、村田三紗子、森 豊、柳沢健一郎、矢野靖子、山口国行、山根友三郎、山本駿一、油井信春、吉川正宏(#は当日の幹事)

(杉岡昌明)

よんまる同期会

昭和40年

昭和40年卒業の同期会を、2002年11月30日に開きました。会場は、錦糸町駅近くの、東京マリオットホテルで、33名が出席してくれました。野口幹事長の挨拶にはじまり、残念ながら亡くなられてしまった同期生に、黙祷をささげたあと、ホテル自慢の中華料理と美酒をいただきながら、久しぶりの再会で、話はずみしました。



私達の年齢から、すでに退職して次ぎの仕事についている人、趣味の世界にのめりこんでいる人、今でも日常の診療にたずさわっている人など、多様な環境の人達の集まりとなり、話の尽きることはありませんでした。二次会は、同ホテルの最上階のスカイラウンジで、夜景を眺めながらの痛飲。歳のわりには、みんな酒豪だと再認識しながら、野口・柳澤・服部の三幹事は、役目を終えました。(服部芳夫)

ちよに会

昭和42年

平成15年1月13日の成人の日に、新装なった京成ホテルミラマールで、2年ぶりのちよに会が行われた。ちよに会とは、千葉のちよ42を組み合わせた名称で、昭和42年の卒業生と、途中同級生であったひとを入れた会である。京成ホテルミラマールはかつて学生時代に千葉市内で唯一の洋風ホテルであった京成ホテルが生まれ変わったもので、ホテルとその近傍の発展・変貌振りを見てもらいたいという、幹事の意向によるものであった。出席者は36名であったが、出席予定であっ

た恩師お2人が共にご都合が悪くなり、参加していただけなかったのが残念であった。開会に先立ち、この2年間に逝去した大野 了君、徳永 勲君、星野 豊君への黙祷が行われた。ちよに会のはとんどの仲間が還暦を過ぎており、あらためて自分たちの余命を実感すると共に、先に逝った3君の若かりし頃の面影などを浮かべ、冥福を祈った次第である。その後、恩師代理を急遽命じられた伊藤達雄君の乾杯の音頭に続き、ホテ



ル自慢の中華料理を賞味しながら、恒例の各自の近況報告がなされた。出席者はまだ全員現役であるが、自分の病気のことを話すひとが増えてきたようで、途中皆で問診しているかのような状況まで笑いのうちに展開された。年をとると話が長く時間内に終わらないのではという幹事の心配も徒労に終わり、その後自由な楽しい

各地のはな会

だより

歓談の時を30分ほど持ち、2年後の来会を、そして黙祷の対象にならないよう注意することを約束して散会した。(服部孝道)

神奈川のはな会

平成14年度神奈川のはな会総会が開催されました。平成14年7月13日(土)午後6時から、例年のように

横浜駅西口のホテルリッチ横浜で、神奈川のはな会総会、懇親会が開かれました。今年以來賓に、本部から、のはな会会長長澤仁一(東京のはな会会長)、のはな会事業担当の鈴木信夫(第二生化学教授)、静岡のはな会嶋田務(聖隷浜松病院副院長)の諸先生をお招きしました。富田裕会長挨拶に次いで、昨年度中に亡くなられた会員、宮内義之助(昭6)、五十嵐松二(昭30)、原紀道(昭38)、神奈川のはな会副会長)の皆様は黙祷を捧げました。引き続き、平成13年度庶務報告、決算、14年度の予算が承認され、新任の役員に副会長、森豊(昭37)、幹事、松岡俊介(昭39)、依田勇二(昭32)の皆様が選出されました。また、本会の運営をより円滑にするために会則の一部変更が承認されました。來賓を代表して長澤仁一先生にご挨拶を頂き、続いて特別講演となりました。今年植村研一先生(昭34)(愛知医科大学看護学部教授・平14・10)岩手県宮古市加藤病院院長、浜松医科大学名誉教授、脳神経外科より「これからの医療における望ましいコミュニケーション

「ジョン」と題するお話を伺いました。記念講演後、参加者全員の記念撮影を行い、懇親会に入りました。5名の神奈川県出身の現役学生さんをご招待し、総勢58名の賑やかなパーティーとなりました。植村先生の落語で盛り上がり、58歳で医師国家試験に合格された上野高岡先生(平14)からも楽しいお話を頂きました。

神奈川のはな会の総会は毎年7月の第一、もしくは第二土曜の夕刻開始とここ10数年慣例となっています。また、席上、近隣のはな会のお知らせ(今年は、千葉県・静岡県)の会誌、沖繩のはな会30周年記念誌などを展示し、他地区の皆様のお話をお知らせしています。



富田会長以下、今後も老若を問わず同窓生の皆様にあつちをもちたいと思っております。特に学生さんや研修医の皆様とお話の機会が持てることは、亥鼻を懐かしむ卒業生にとってこの上ない楽しみです。皆様、来年

も是非ご参加ください。終りに、昨年まで本稿を担当され、副会長として本会のために多大なご尽力を賜れた故原紀道先生に深く感謝申し上げます。(三科孝夫・昭46)

安房のはな会

平成14年9月6日(金)午後6時より、安房のはな会総会はたてやま夕日海岸ホテルにおいて開催された。

今回は平成13年4月より千葉大学第一外科の教授に就任された宮崎 勝先生を

お迎えして行われた。本位田泰介会長の挨拶があり、のはな会の会計収支報告がなされたのち、「千葉大学医学部の現況について」大学院大の件や国立大学の特殊法人化の問題等を含む一連の講演がありました。

記念撮影のあと野原 宏先生の乾杯発声で懇親会に移りました。多くの会員のご出席を戴き和気あいあいのうちに散会した。

なお、青木謹前安房医師会長が4年間の任期を全うされ3月一杯で退任された。御苦労様でした。

出席者：野原宏(専17)、本位田泰介(昭28)、貴家昭而(昭30)、蟹沢晴子(昭32)、原 久弥(昭34)、西川義明(昭34)、関谷信平(昭38)、中村 宏(昭43)、上村公平(昭50)、渡辺啓治(昭61)、佐伯雅基(埼大平1)、辻 博勝(平2)、三田謙(平3)、天野晋(平3)、河木 潤(島根平3)、若林康夫(金沢平4)、佐伯美奈子(平5)、高野重昭(平9)、鈴木建



則(平10)、山田教和(顧問)(西川義明・昭34)

群馬のはな会

平成14年11月9日前橋市マキキョリホテル慶雲の間で群馬支部総会を東京から長澤仁一のはな会々々長をお迎えして開催した。初めに平成14年7月に逝去された赤石克己先生(昭19)の御冥福を祈り黙祷を捧げた。次いで沖真澄会長の挨拶と会務報告、山口隆久幹事の会計報告があり承認された。続いて長澤会長から

次の三点に就いてお話があった。支部の会報作製の為の助成金として150万円を予算に計上しているから群馬でも早く会報を発刊し、不足分は本部に請求して欲しい。今回出版されたのはな同窓会名簿は医学部の旧研究室名と新たな大学院の名称とが合致せず電話をかけるのにも大変不便を感じている。今年4月、10月の診療報酬改定では開業医は大打撃を被っている。早晚開業医のみならず日本の医業は立ち行かなくなる、開業医同志一致団結して何らかの対策を講じる必要があると力説されていた。誠に同感。今日の日本の医療が医師と医療従事者の犠牲的奉仕と過酷な労働条件の基に成り立っている。国民の負担増しを阻止する為にも現状を改変する必要があると思う。次いで平形義人先生の御発声で乾杯、懇親会に入った。再び沖会長から御発言があり11月は諸行事が多く、本日の出席者は14名と少なく、今後開催日に就いて



では検討事項であると、喜ばしいことに2名の新会員があり五十嵐裕章、齋藤裕之の両先生を紹介された。現会員数57名で会費納入は35%であり、会員相互の連携を助け、動静を知る上で是非平成15年内に会報を発刊したいと提言があった。根本幸一先生が編集担当に指名され平成15年3月末日までに原稿募集、秋の総会までに創刊号発刊と決まった。会員の近況報告と自己紹介があり、又恒例のこととして、体調不良で欠席された、北村英吾(昭12)、星野久次(昭13)、鈴木不二夫(昭15)、橋本五郎(昭18)諸先生に激励の色彩を書く。談論風発、老の

将に至らんとするを知らざる一刻でした。出席者：平形義人(昭19)、沖真澄(昭22)、黒住一昌(昭24)、山口隆久(昭25)、大塚功(昭27)、長谷川透(昭29)、鹿山徳男(昭29)、根本幸一(昭29)、西村忠雄(昭32)、中田益允(昭35)、黒岩璋光(昭37)、本島梯司(昭45)、五十嵐裕章(昭60)、齋藤裕之(平元)。

**のはな同窓会
山梨支部報告**

平成14年7月27日に、山梨のはな同窓会が甲府市の「古名屋ホテル」で、会員35名中16名の出席で開催されました。

当日は、大学より野村文夫教授(大学院医学研究分子病態解析学、附属病院検査部長)をゲストにお迎えしました。

今回は、平成8年4月以来、3期6年にわたり山梨県医師会長の重責を果たされました。溝部孝二先生の労をねぎらう意味も兼ねた会でした。

佐々木芳岡会長のご挨拶に始まり、小林清房先生の乾杯ご挨拶をいただき、幹事(中澤 肇、相原正男)より会計報告と会務報告を

行ないました。

大学より遠路
来申いただきま
した野村教授に
は、最近の学内
の状況、学長選
挙、新任の教授
薬学部に移転、
先生のご専門の
分野のトピック
ス、その他、野
村教授らしい用
意周到な懇切丁
寧なお話をいた
だき、一同感慨
深く拝聴いたし
ました。

懇親会では、
出席の会員一人
一人が近況を話し、また、
なつかしい思い出話も出て
親交を深めることができました。

当日出席者：佐々木芳岡
(専19)、原山嘉彦(専24)、
横山 宏(専25)、小林清
房(昭27)、土屋和子(専
27)、保坂 達(専27)、赤
星至朗(昭34)、塚原重雄
(昭36)、山角 博(昭36)、
三井 静(昭38)、清水
天(昭39)、山口正敏(昭
39)、中澤 肇(昭52)、鶴
田好孝(昭54)、相原正男
(昭56)、細田和彦(昭58)
(中澤 肇・昭52)



平成14年度
埼玉県支部総会

懇親会報告

本支部では県下3地区を
輪番制で当番幹事の持ち回
りをしております。今回は
浦和地区が担当でした。

8月25日(日)に浦和の
パインズホテルで酷暑の午
後3時より開催されました。

総会の第一部は会務報告・
本部報告等です。

浦和の代表で副支部長で
ある済陽高穂君の開催の辞
で始まりました。

議題に先立って前年度に
物故された梅沢恂二先生
(昭26)、方波見猛先生(昭

20)、野崎浩次先生(昭25)
のご冥福をお祈りして黙祷
が捧げられました。

司会は外科他で開業の林
田和也君で、支部長の井上
幸万先生のご挨拶を皮切り
に、林田君の落ち着いた議
題運びで円滑に滞りなく進
められました。

第一部の最後には、平成
14年に喜寿を迎えられ、当
日お元氣にご臨席いただい
た石井邦夫先生、大野信次
先生、鈴木忠男先生、春田
孝正先生へ支部を代表して
支部長からお祝い品が贈ら
れ、終了となりました。

第二部は講演会です。
第一席目は、時宜に合わ
せ厚生労働省から遠藤弘良
先生(昭55)をお招きしま
した。

司会は埼玉県保険局の田
口勝先生にお願いしました。
ご演題は「厚生行政の動
向」。医療制度改革と構造
改革、EBM、IT化等に関
する経緯と現況について、
将来を見据えて解説が行な
われました。

司会者から問題点や疑問
点がやんわりと指摘された
後、フロアーの石井邦夫先
生、吉川広和先生、中川宏
治君と活発に質疑応答がな
されました。

遠藤先生には、多くの鋭
い質問に対しても丁寧にこ



回答をいただき
ました。なお先
生はご都合で講
演会のみにてお
帰りになられま
したので、懇親
会での忌憚のな
い意見・情報の
交換という面か
らは少々心残り
でした。

第二席は大学
から整形外科学
教授守屋秀繁先
生(昭42)をお
招きして学内事
情についてお話
いただきました。

司会は、大学
で同門であり、
本県下で整形外
科を開業されて
いる金田庸一君
です。

講演は分か
り易い平易なお
言葉でじっくり
と丁寧に面白く進
められました。

場内はしばしば
笑いの渦に包ま
れ、和やかな雰
囲気に満ち溢れ
ていました。

お話は、大学
院と大学病院の
問題点、関連病
院と医学部人事、

回答をいただき
ました。なお先
生はご都合で講
演会のみにてお
帰りになられま
したので、懇親
会での忌憚のな
い意見・情報の
交換という面か
らは少々心残り
でした。

学内での古墳発掘にまでお
よび大いに盛り上がりまし
た。

大学の置かれている危機
的狀況を、このように噛み
砕いて且つユーモアを交え
て解説いただき、一同感銘
を受けました。

懇親会は、記念撮影をは
さみ、会場を隣接する部屋
へ移して開かれました。

司会は整形外科開業の野
口哲夫君で、メリハリをもっ
て正確に進められました。

まず前支部長の水間正冬
先生からご挨拶をいただき、
大長老の名尾良憲先生の乾
杯の音頭をもって宴会が始
まりました。守屋教授にも、
ご多忙にもかかわらず、ご
臨席いただきました。

喜寿の先生方から順次お
元氣なお言葉を賜った後、
多数の先生にご挨拶を頂戴
致しました。若い先生方の
出張病院での活躍ぶりも
ご披露いただき心強い限り
でした。

例年同様に、時間が経つ
につれ、会場で席を移され
て親交を重ねられる姿があ
ちこちに見受けられました。
更にまた、次回開催予定
の熊谷地区を代表して冠木
徹彦先生からのご挨拶と栃
木亮太郎先生からのご案内
にお言葉をいただき、終り
に済陽君のお礼をもって閉

会となりました。
二次会には若い先生方に
も最後までお付き合いいた
だきました。活気溢れる集
いでした。

支部会員出席者49名は以
下の通りです(敬称略、カッ
コ内は卒業年度)。
名尾良憲(昭13)、水間
正冬(昭17)、大野信次
(昭23)、木村滋(昭23)、
鈴木忠男(昭23)、春田孝
正(昭23)、石井邦夫(昭
26)、中神義男(昭26)、有
田文章(昭27)、井上幸万
(昭27)、有馬道男(昭29)、
伊藤敏夫(昭30)、高橋康
(昭30)、横田俊二(昭30)、
森碧(昭31)、田口勝(昭
34)、阪信(昭35)、松山迪
也(昭35)、永田一郎(昭
35)、松本生(昭36)、冠木
徹彦(昭40)、栃木亮太郎
(昭40)、吉川広和(昭40)、
赤井寿紀(昭43)、伊藤進
(昭43)、齊藤弘司(昭43)、
諏訪敏一(昭43)、済陽高
穂(昭45)、大友一夫(昭
46)、金田庸一(昭46)、野
口哲夫(昭48)、土佐寛順
(昭50)、伊古田裕子(昭51)、
菱沼静雄(昭51)、小林彰
(昭52)、林田和也(昭52)、
中村勉(昭52)、西山秀木
(昭54)、山下純男(昭58)、
中川宏治(昭59)、今野慎
(昭62)、尾本秀之(平1)、
渡辺裕之(平2)、石塚満

支部会員出席者49名は以
下の通りです(敬称略、カッ
コ内は卒業年度)。
名尾良憲(昭13)、水間
正冬(昭17)、大野信次
(昭23)、木村滋(昭23)、
鈴木忠男(昭23)、春田孝
正(昭23)、石井邦夫(昭
26)、中神義男(昭26)、有
田文章(昭27)、井上幸万
(昭27)、有馬道男(昭29)、
伊藤敏夫(昭30)、高橋康
(昭30)、横田俊二(昭30)、
森碧(昭31)、田口勝(昭
34)、阪信(昭35)、松山迪
也(昭35)、永田一郎(昭
35)、松本生(昭36)、冠木
徹彦(昭40)、栃木亮太郎
(昭40)、吉川広和(昭40)、
赤井寿紀(昭43)、伊藤進
(昭43)、齊藤弘司(昭43)、
諏訪敏一(昭43)、済陽高
穂(昭45)、大友一夫(昭
46)、金田庸一(昭46)、野
口哲夫(昭48)、土佐寛順
(昭50)、伊古田裕子(昭51)、
菱沼静雄(昭51)、小林彰
(昭52)、林田和也(昭52)、
中村勉(昭52)、西山秀木
(昭54)、山下純男(昭58)、
中川宏治(昭59)、今野慎
(昭62)、尾本秀之(平1)、
渡辺裕之(平2)、石塚満

君津木更津
あのはな同窓会

平成13年度

平成14年2月6日、臓器制御外科学教室(第一外科)宮崎 勝教授をお招きして、当地あのはな会総会は、会員50名の参加を頂き、盛大に開催されました。総会にて、ご他界なされた、鈴木達也先生、川口新一郎先生のご冥福をお祈りし、報告事項などをすませて、宮崎教授のご講演に入りました。演題は「進行胆道癌に対する最近の手術の工夫」でしたが、昭和の時代には、胆道癌は場所も悪く、予後も悪いので、根治手術が少なかつたと思っておりました。しかし、先生のお話で、大血管の切離、吻合も含め、考えられないような根治手術が実施されており、まさに感激させられることのみでした。ただし、先生は、日本でもトップの外科医であり、肝胆膵系外科のリーダーでもありますので、当然の事かもしれませんが、驚くべき手術の進歩を見せていただきました感謝致しました。

手術のビデオをみせていただいた後、我々にはなじみの薄い、臓器別に分けられた、新しい教室のあり方のお話を伺いましたが、生まれる前より続いている、第一内科とか第一外科の名称が無くなるのは、とても寂しい気持ちになりました。それでも、医学の進歩の為に拍手をおくりました。二次会は、君津中央病院の若い先生も多数参加してください、大変賑やかに、夜遅くまで過ごす事ができました。

た。
◎幹事の怠慢で1年後の地区あのはな会同窓会報告が、一緒に提出された事を、お詫び申しあげます。

平成14年度

平成15年2月19日(水)、寒さも厳しい日でしたが、当地あのはな会は、再建医学形成外科学教室 一瀬正治教授をお迎えして、盛大に開催されました。ご他界なされた、椎名正之先生のご冥福をお祈りし、この1

年間の活動・事業報告を済ませ、教授のご講演を拝聴致しました。
形成外科という分野は新しく、美容整形との違いをまだ理解出来ていないところもありましたが、次々に出てくるスライドを見せていただき、お話を伺っておりますと、頭頸部にわたる悪性腫瘍の根治手術後の再建は、我々が考えていたより壮絶で、一昔前までは家に引きこもり、大きなマスクで顔中を覆っていた患

者さんの社会復帰が出来ている事に、大変驚き、感謝の念を持つ次第でした。また、全身火傷で、表面臓器がほぼ消失している患者を、10年単位で治療してゆく地道な努力にも、感動させられました。

ご専門の話の後は、新卒医師の卒後研修問題を話していたのですが、2年間の研修義務化で、指導する側も大変な努力をしなければならぬようですが、医師は一生勉強という事であり、我々も負けずに勉強会に参加していきたいと思

いました。
二次会は、例年どおり多くの先生方に参加して頂きましたが、厳しい幹事の命令で、全員カラオケ一曲と義務づけられて、大変つらい思いをさせられました。(松清 央・昭43)

多摩あのはな会

多摩あのはな会は14年11月21日立川グランドホテルで開催されました。第I部の講演会では昨今の医療情勢に鑑み、青梅市立総合病院診療局長兼脳外科部長を退職し、開業されたばかりの宮崎崇先生に、「医療訴訟の防止」と題してお話しいただいた。

訴訟問題は会員の関心事であり、その防止について臨床における心構え、患者家族へのアプローチ、さらに卒後教育の在り方など実践的な内容で参考になりました。

第II部の懇親会の席上でも活発な発言があり、宴会を楽しみながら研究会をやっているようで大変有意義でありました。
特にある先生より臨床経過から考えて、回避するのが難しかった訴訟例について体験談があり一同感銘をうけたしいです。

この会は28回を数え、参加される昭和10年代、20年代卒の先輩のお元氣振りが際立っておられます。昭和60年代以降の若い世代の参加を切に願っています。
出席者、正宗幹夫(昭14)、永井友二郎(昭16)、清水衛(昭19)、吉岡作(昭23)、田口正義(昭26)、佐野迪雄(昭29)、羽生富士夫(昭29)、野本和男(昭30)、松田三樹男(昭30)、鈴木光(昭36)、神津玲子(昭43)、林恒男(昭44)、宮崎

多摩あのはな会



宗(昭44)、村山正昭(昭45)、菊池友允(昭47)、石川てる代(昭53)、野本正嗣(昭54)、藤田明(昭55)。(村山正昭・昭45)

52会々告

2003年度同期会兼総会を、10月12日(日)東京で開催することになりました。詳細については、後日各人宛に連絡します。

52会幹事会
(代表幹事 古川翁)

平成13年度



平成14年度



卒業生進路

千葉大(二内科) 大岡美彦、篠崎勇介、鈴木英一郎(二内科) 上原孝紀、高橋健太郎、武谷明栄、鶴谷悠也、山本麻衣(三内科) 上原雅恵、大熊麻衣子、森野知樹(放射線科) 葛西孝美、堀越琢郎(二外科) 柗沢政司、神谷潤一郎、清水英治、土居厚夫、野島広之、林達也、(二外科) 太田拓実(整形外科) 高橋宏、宮城正行、村上賢一(産婦人科) 錦見恭子、山地沙知、花岡大資(泌尿器科) 小林将行、木納美香、柳澤充(耳鼻咽喉科) 堅田浩司、山崎一樹(小児科) 塩濱直、関水匡大、高谷真純、武智史恵、道下崇史、千原由美子(精神科) 織田泰寛、新津富史(麻醉科) 上野翠、遠間奈津子(脳神経外科) Masumi Binti Arbak (神経内科) 伊藤敬志、小川喜胤、島田斉、藤沼好克、山中義崇(小児外科) 八幡江里子(形成外科) 頃安久美子、佐藤真嘉、三木規子、山路佳久(呼吸器内科) 青木利夫、芦沼宏典、北園聡、齊藤美弥子、杉浦寿彦

早失佳、村田麻里(産婦人科) 手塚真紀、林ゆり子 慶応大(眼科) 高橋奈々恵 (皮膚科) 田村舞 山梨大(小児科) 野口佐綾香 横浜市中大 辛島文 京都大(心臓血管外科) 李記璋 新潟大(小児科) 真柄慎一 金沢大(放射線科) 水野英一

「JRR東京総合病院」 篠原翼、富樫佑基 「西神戸医療センター」 中本祐樹

平成15年度 医学部入学者

「秋田」 遠田 泰平 「茨城」 安藤 友久 大和田 藍 忍田 陽香 小林 和史 佐藤 真洋 高橋 歩美 千葉 文子 中野 明 滑川 剛史 牧田 莊平 松岡 潤 「栃木」 飯田 英和 「群馬」 正谷 憲宏 須賀 孝慶 「千葉」 足立 明彦 池田 彩 平良 暁子 會田 直弘 有里 裕生 磯崎 哲朗 井上 雅寛 緒方 健一 影山 貴弘 金 美怜 小林 真史 佐藤明日香 立石 和也 野々村菜穂 原田 和明 平山 訓子 藤岡 瑞紀 升田 貴仁 山本 智史

「都立駒込病院」 柳澤如樹 「聖路加国際病院」 春日章良 「NIT東日本関東病院」 河口貴昭 「武蔵野赤十字病院」 嘉納寛人 「横浜栄共済」 石橋史博 「旭中央病院」 横山真隆 「中部徳洲会病院」 杉本龍史 「西神戸医療センター」 中本祐樹

「環境影響生化学」 佟曉波 「加齢呼吸病態制御学」 岡田理、河野正和、瀬戸武志、村田研吾、安井山広、弥富真理 「循環病態医学」 石橋聡、岩永孝治、上田希彦、行木美奈子、本城祐子、宮原啓史、李光浩 「精神医学」 松澤大輔 「公衆衛生学」 真下陽一 「環境労働衛生学」 稲葉岳也、上谷美礼、大石充宏 「法医学」 矢島大介 「感染生体防御学」 房浩 「環境生命医学」 穴原玲子、大道公秀、中本真 「真菌高分子活性学」 アメドハナフイ、向井啓 「病原真菌系統・化学」 大堀陽 「遺伝子機能病態学」 加藤智規、川口真琴、矢野仁、山本香織 「分子病態解析学」 木村明佐子、轟華 「放射線腫瘍学」 Abu Anne 「胸部外科学」 岩田剛和、矢代智康 「臨床分子生物学」 Inai, Masao Alberto、加藤久視、加藤義国、齋藤謙吾、中嶋大、東壽一郎 「耳鼻咽喉学」 内田哲郎 「整形外科学」 伊藤俊紀、井上玄、岩崎潤一、荻野修平、嶋田博人、北原聡太、染谷幸男、三浦陽太、宮坂健、村田亮、山口智志 「形成外科学」 大森直子、川上順子、栗山元根、長谷川正和 「腫瘍内科学」 大野泉、小林哲、酒井裕司、瀬座文香、瀬座勝志、土屋慎、榎谷佳生、三方林太郎、三村尚也、吉住博明 「臓器制御外科学」 金子高明、釜田茂幸、川本潤、久保木知、黄野皓木、小林壮一、崔玉仙、齋藤徹、櫻井学、塩入誠信、志田崇、篠崎秀博、杉原毅彦、鈴木大、高野重紹、永井啓之、新妻ゆり子、福富聡、藤田久徳、守屋智

柳本紗奈美 矢野 晶子 矢野 綾子 山村 智彦 吉田 陽一 吉原晋太郎 若林 慎一 渡辺 宗介 「神奈川」 岡東 篤 濱中 紳策 山淵 園子 吉田 輔 「山梨」 斎藤 佑一 進藤 俊 「静岡」 伊藤 修司 後藤 昌也 「三重」 佐脇麻里亜 「広島」 蔵田 能裕 若松 徹 「愛媛」 杉田 銃 「長崎」 中上 桂吾 「熊本」 直海 有香 「鹿児島」 齊木 玲央 中川誠太郎 中田 亮 樋上 裕起 李 智裕

平成15年度 大学院医学薬学府入学者

「和城光庸」 「小児病態学」 井上祐三朗、菱木はるか 「小児外科学」 佐々木恒、武之内史子 「免疫細胞学」 新中須亮、天田由幸、三木多香子、渡会浩志 「発生生物学」 李相芝 「視覚病態学」 阿部秀樹、横内裕敬 「神経統御学」 大石博通、松浦威一郎、米山智子 「神経病態学」 平野成樹、三澤園子 「分子ウイルス学」 王剛 「遺伝子生化学」 守屋彰悟 「生殖機能病態学」 大森万里子 「先端応用外科学」 太田義人、角田慎輔、北林宏之、早野康一、松永晃直、間宮俊太、吉見浩 「救急集中治療医学」 幸部吉郎、立石順久 「細胞治療学」 磯野貴史、上原広嗣、大矢佳寛、大脇健一、小澤真一、小出尚史、曾根崎桐子、武内正博、徳政直起、徳山隆彦、畠山一樹、藤原道雄、布留川潔、吉原慶 「臨床遺伝子応用医学」 姜美子 「基質代謝治療学」 溝口雅子

がんセンター 崎山 樹(昭39) センター長(同研究局長) 渡辺 一男(昭41) 副センター長(同医療局長) 河崎 純忠(昭44) 診療部長(同手術管理部長) 平井真紀子(昭58) 主任医長(医長より) 鈴木 正人(昭62) 医長(千大一外助手) 辻村 秀樹(岐阜平3) 医長(NIH) 安福 和弘(平4) 医長(千大・呼外) 伊藤 泰平(筑波平6) 医長(沼津市立病院医長) 高橋 俊之(平7) 医長 循環器病センター 川副 泰隆(昭59) 医長 須藤 英文(平4) 医長(安房医師会病院・整外) 谷嶋 紀行(神戸平6) 医長 興津 由美(平8) 麻醉医長(千大・麻) 救急医療センター 中村 弘(昭53) 診療部長(同診療部第二診療科部長) 小林 繁樹(昭54) 診療部第二診療科部長(同主任医長) 沖本 光典(昭50) 診療部第四診療科部長(同主任医長) 嶋村 文彦(昭63) 医長(千大一外助手)

千葉県市職員異動

本庁

渡辺 義郎(昭44) 健康福祉部技監・ちば県民保健予防財団派遣(健康福祉部技監)

大石 博通(平3) 脳外医 長(成東病院院長)	長(こども病院第一内科 長)
和田 政則(福井平8) 脳 外医長(同医師)	西山 裕孝(昭49) 脳神経 外科部長(松戸市立病院)
こども病院 田辺 雄三(岐阜昭53) 診 療部第一内科部長(主任医 長)	東条 雅季(昭58) 泌尿器 科部長(成田赤十字)
宮本 茂樹(昭51) 診療部 第二内科部長(主任医長)	林 幸雄(長崎大南平5) 歯科医長(同医師)
高柳 正樹(金沢昭50) 診 療部小児救急総合診療科部 長(第二内科部長)	鶴飼 伸一(平6) 内科医 長
星岡 明(昭58) 主任医 長(医長)	新村美代子(平8) 眼科医 長(同医師)
中島 弘道(昭58) 主任医 長(医長)	溝口 勝(昭41) 木更津 (佐倉)
青木 満(昭58) 主任医 長(医長)	大野由記子(東北昭57) 山武(習志野)
染谷 知宏(平6) 医長 (同医師)	千葉県職員より退職 野平 勲一(関西医大昭42) 健康福祉部技監
有本有季子(平8) 医長 (千大・耳 助手)	長山 忠雄(昭38) がんせ ンター長
星野 直(平4) 医長 (同医師)	野本 泰正(昭38) 佐原病 院医療局長
東金病院 榎本 和夫(福島医大昭53) 医療局長(診療部長)	内田佐太臣(東邦昭37) 木 更津保健所長
永原 健(昭60) 整形外 科部長(医長)	岩井 直路(昭37) がんせ ンター主任医長
竹尾 愛理 内科医長(千 大・二内)	佐藤 章(昭46) 救急医 療センター検査部長
堀江 篤哉(福井医大平8) 内科医長(千大・二内)	石川 隆一(昭49) 救急医 療センター第四診療科部長
佐原病院 伊勢 博(昭51) 医療局 長(診療部長)	鈴木 洋人(平2) がんせ ンター医長
中村 明(昭48) 診療部	五月女 隆(平2) がんせ ンター医長
	砂澤 徹(新潟平3) 救 急医療センター医長

大橋 幸雄(三重平1) 循 環器病センター医長	阿部伊知郎(平2) 循環器 病センター医長
石塚 俊治(昭62) 東金病 院医長	景山 雄介(昭58) 佐原病 院脳神経外科部長
本田 崇(昭62) 佐原病院 医長	千葉市 加藤 嘉市(昭36) 保健福 祉局健康部技監・市立海浜 病院技監(市立海浜病院長)
山下 武廣(昭39) 市立海 浜病院院長(市立病院副院長)	更科 廣實(昭42) 市立病 院副院長(診療局長)
高橋 長裕(昭45) 市立病 院診療局長(市立海浜病院 診療局長)	広瀬 彰(昭48) 市立海 浜病院診療局長、眼科部長 事務取扱(整形外科部長)

**第97回
医師国家試験成績**

試験日	平成15年3月15日(土) 16日(日)・17日(月)
合格発表	平成15年4月24日(木)
受験者	97
合格者	83
合格率	85.6%
参考	
国立	
合格者	4100
合格率	91.4%
全国	
合格者	7721
合格率	90.3%

平成14年度第3回常任理事会議事録

日時 平成15年2月26日
(水) 午後3時30分～5時

場所 千葉スカイウイン
ドゥズ東天紅・天
海の間(センシテイ
タワー22階)

出席者 秋葉哲生、大藤正
雄、大浜博利、沖真澄、
小幡裕、神田収茲、木内
政寛、香田真一、近藤洋
一郎、三枝一雄、佐藤甫
夫、白澤浩、滝口正樹、
長澤仁一、武者廣隆、吉
川廣和、渡辺武、済陽高
穂

議題
一、昇任者の四金会招待に
ついて
滝口理事より説明があり、
承認された。
二、平成15年度行事予定に
ついて
滝口理事より今年度との
異同について説明があり、
承認された。
三、同窓会報関係
白澤理事より、同窓会報
の発行予定について報告が
あった。
四、四金会
引き続き同所で四金会が
行われた。滝口理事の司会
で、長澤会長の御挨拶、小
幡副会長の乾杯御発声に始
まり、和やかに歓談の時を
過ごした。御出席各位の近
況紹介に続き、あのはな祭
とも折衝することとした。
二、平成15年度予算編成に
関して
白澤理事より、懸案への
対応に要する予算措置につ
いて説明があった。同窓会
活性化調査費、同窓会館補
修費、あのはな祭助成金、
新規採用予定職員給与につ
いて予算措置する旨確認さ
れた。

報告事項
一、予算執行状況(中間報
告)
木内理事より、平成14年
度予算執行状況、決算予測
について報告があった。

二、将来検討委員会関係
白澤理事、木内理事より、
会員アンケート、インタビュー
の結果に基づく現状分析と
活性化手順案について説明
があった。

三、同窓会報関係
白澤理事より、同窓会報
の発行予定について報告が
あった。

四、四金会
引き続き同所で四金会が
行われた。滝口理事の司会
で、長澤会長の御挨拶、小
幡副会長の乾杯御発声に始
まり、和やかに歓談の時を
過ごした。御出席各位の近
況紹介に続き、あのはな祭

平成15年度第1回常任理事会議事録

日時 平成15年4月23日
(水) 午後3時30分～5時

場所 千葉スカイウイン
ドゥズ東天紅・天
海の間(センシテイ
タワー22階)

出席者 大藤正雄、大浜博
利、沖真澄、小幡裕、貫
洞一夫、香田真一、三枝
一雄、佐藤甫夫、佐藤通
白澤浩、鈴木信夫、瀧口
正樹、長澤仁一、野村文
夫、福田康一郎、道永麻
里、武者廣隆、村瀬靖、
吉川廣和、渡辺武、済陽
高穂

議題
一、名誉会員の推薦につ
いて
滝口理事より、平成15年
3月に退官された安達恵美
子、大和田英美、木内政寛、
千葉胤道各先生の名誉会員
への推薦趣旨の説明があり、
承認された。
二、四金会招待について
滝口理事より、新名誉会
員、新任、昇任教官の招待
会であった。渡辺副会長の
御挨拶で中絶となった。

**三、平成14年度決算案につ
いて**
白澤理事より、決算内容
についての説明と、秋葉、
笠川両会計監事の監査報告
についての説明があり、決
算案が承認され、総会に提
案することになった。

**四、平成15年度事業計画に
ついて**
滝口理事より、説明があ
り、承認され、総会に提案
することになった。例年の
事業に加え、同窓会館補修
支援、亥鼻祭支援、同窓会
活性化施策(会員の意見集
約、講演会開催等)の遂行
を提案することとした。
五、平成15年度予算案につ
いて
白澤理事より、説明があ
り、承認され、総会に提案
することになった。前記事
業計画に予算措置すること
とした。
六、あのはな同窓会賞選考
結果について
鈴木理事より、選考委員
会による選考経過と、功労

賞(2名)、学術賞(4名)の各候補者の推薦理由の説明があり、承認された。

七、総会議案について 鈴木理事より、平成15年度総会の日程、議案について説明があり、承認された。

九、役員交代について 滝口理事より、鈴木理事の事業担当から庶務担当への変更、神田理事から栗原理事への交代、木内理事から宮崎理事への交代、鈴木理事から野村理事への交代(事業担当理事の補充)、嶋田参与から木内参与への交代について説明があり、承認された。

一、同窓会関係 白澤理事より、同窓会報の発行予定について報告があった。新編集委員長に古関明彦教授が就任する旨報告があった。

二、同窓会活性化試案 鈴木理事より、検討経過の報告と、講演会開催計画の報告があった。白澤理事より、会員の意識調査に関する報告があり、若年層に

対する支援、広報活動が重要との総括があった。

四、金会 引き続き同所で四金会が行われた。鈴木理事の司会で、長澤会長の御挨拶、福田理事・研究院長の乾杯御

10年振りに「亥鼻祭」を開催!!

千葉大学医学部学生自治会 2003年亥鼻祭実行委員長 4年 吉村 健 佑

私は、今年度の亥鼻祭実行委員長を務めております医学部4年の吉村と申します。先日は四金会の席上で、幸運にもご挨拶の機会を与えて頂きありがとうございます。今回は、あのはな同窓会報の紙面をお借りして、10年振りに開催します亥鼻祭についてお知らせ致します。

亥鼻祭の歴史は古く、西千葉・松戸の両キャンパスに先立ち、千葉大学で一番初めに行われた大学祭と聞いております。医学部在学当時、亥鼻祭に参加された思い出のある諸先輩方も大勢いらっしゃるのではないのでしょうか。しかし大変残念なことに、1993年以来10年間に渡り亥鼻祭は開催されておられません。

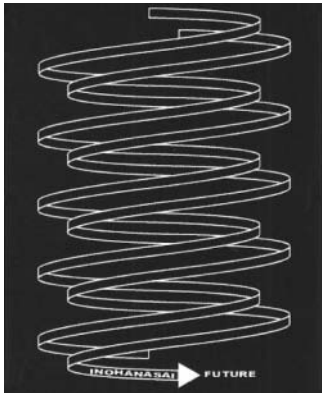
発声に始まり、和やかに歓談の時を過ごした。多数の新名譽会員、新任、昇任教官、御出席各位の御挨拶もあり、賑やかな会であった。井出名譽会長の御挨拶で中絶となった。

このまま亥鼻祭が失われてしまうことは千葉大学の大切な伝統と、学生による主体的な課外活動の場の喪失と考え、今年1月に本実行委員会を充足致しました。2003年11月2、3日の10年振りの亥鼻祭に向けて活動しています。

亥鼻祭を行うことで、ともに亥鼻で学ぶ医学部・看護学部の学生が学部や学年や部活動の枠を越えて共に協力し、本キャンパスの活動とその魅力を地域の方々にはじめ社会に広く発信してゆきたいと考えています。さらに現状として、国立大学は来年春の独立行政法人化を目前に控えています。私達千葉大学生としても、亥鼻祭を契機に学生と教職員とが共に千葉大学の今後

を考え、様々な提案をしていきたいと考え、今回の亥鼻祭のテーマを「今の千葉大」でいいんですか?」にしました。亥鼻祭の開催を「魅力ある千葉大学づくりに」への最初の一步にしたと思っています。

亥鼻祭実行委員会の発足以来学生の関心は高く、現時点で医学部と看護学部合わせて約70名が実行委員として活動しており、その数は今後も増加する勢いです。みなで知恵をしぼり、亥鼻祭を一から作りあげていこう、という雰囲気になっております。内容となる企画も「医療系大学祭の最高峰を目指す!」という意気込みで進行しており、大学祭としてこれ以上ない、というほどに充実した中身にすべく、様々な提案がなされていく所です。



2003年亥鼻祭シンボルマーク

う事態も起こりかねません。現在、学生の参加費用負担をはじめ、各方面からの財政的援助をお願いしておりますが苦しい状況です。亥鼻祭の実現のために、あのはな同窓会員の皆様のご支援、ご協力をたまりませう、お願い申し上げます。

- 平成15年 春の叙勲・褒章 勲二等瑞宝章 北川 定謙(昭31) 勲三等瑞宝章 沢田 勤也(昭28) 勲五等双光旭日章 柏戸 正英(昭33) 紫綬褒章 安達恵美子(昭37) 平成15年 表彰 警察協力章 木内 政寛(昭39)



2003年亥鼻祭実行委員

しかし、10年振りの開催のため、前年度の繰り越し金もなく、活動するための予算が全くありません。このままではせっかく企画した内容も予算不足のために中止、とい

『千葉醫學専門學校校歌』

についての補足 石出 猛史(昭52)

『あのはな同窓会報』(2003年1月第132号)および『千葉医学雑誌』(2003年79巻第1号)で、旧千葉医学専門學校々歌について紹介した。その際制作年を大正9年(1920)としたが、その後見出された大正4年(1915)の史料に、曲、詞共に既に掲載されていることが判った。従って「大正9年制作」の記述を訂正する。大正5年の千葉医学専門學校卒業生で、作詞者松原芳樹の在学時期を考慮すると、明治45年(1912)から大正4年の間に制作されたことが推定されるが、猶詳細については不明である。

附属病院二ユース

前病院長 伊藤 晴夫 (昭39)

医学部附属病院の主な出来事 (H14・11・H15・3)
○平成14年12月6日
いわゆる「医局による医師の派遣」にかかる実態調査

千葉公共職業安定所職員が来院し、いわゆる「医局による医師の派遣」と職業安定法との関係について、本院泌尿器科を対象に実態調査が行われた。
○平成14年12月9日～10日
花 展

小原流いけばなの会による「花展」が開催された。会場は、「花と安らぎ」というテーマに沿った柔らかな色調に溢れ、思わず足を止め、魅入る人も多々見られた。
○平成14年12月12日
院内コンサート (クリスマスコンサート)

恒例のクリスマスコンサートの。今回はのびな音楽部による演奏が行われた。多数の患者様が参加し、楽しい一夕を過ごされた。
○平成15年1月29日
禁煙に関する講演会

千葉県がんセンターから講師を招き、「禁煙のすすめ」タバコはいかに体に悪

いか」と題した講演会を開催した。当日は、本院の職員だけでなく、本院以外の大学職員や入院患者さま及び医学部の学生など100名を超える方々が参加した。
○平成15年1月30日
医療事故防止セミナー

医療事故防止の一貫として、医療事故防止セミナーを開催した。当日は、平澤安全管理室長による講演に続き、「ヒヤリ・ハツと事例の分析から改善へ」各部門の取り組み」と題しパネルディスカッションが行われ、活発な意見交換が行われた。
○平成15年1月24日
医師卒後臨床研修管理委員会

平成16年より医師の卒後臨床研修が必修化される。この会は大学病院と関連病院とで連携して良い卒後臨床研修を行うために設置されたものである。平成16年度千葉大学医学部附属病院卒後臨床研修プログラム (案) 等について検討を行った。
○平成15年2月14日
保険診療に関する特別講演会

保険診療の質的向上と適正な処理を図ることを目的として、千葉社会保険事務局指導医療官の佐々木徳秀氏を招き、今回で3回目となる「保険診療に関する特別講演会」を開催した。
○平成15年2月18日
千葉大学医学部附属病院臨床医学研究助成会

ホテルサンガーデンで開催された。第一部の講演は宮崎第一外科長による「肝胆膵癌の外科療法における最近の進歩」についてであった。懇談会では和やかに意見交換が行われた。
○平成15年2月18日
薬学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議よりの病院視察

薬学教育改革に関連して薬剤師の院内での活動について調査するために、3名の協力者と1名の文部科学省職員が来院された。
○平成15年2月27日
介護保険制度等に関する特別講演会

介護保険制度の適正な履行を図るための改善策の一環として開催された。当日は、千葉県医師会理事の守正英氏により「要介護 (要支援) 認定における主治医意見書の提出及び記載等について」と題し講演が行われた。
○平成15年2月28日
千葉大学医学部附属病院有識者懇談会

外部から有識者を招き、自由な立場で大学病院に対する意見をいただいた。当日は、弁護士堀美雅子様、看護連盟千葉支部長長土屋禎子様、千葉日報会長長土屋秀雄様、陶芸家土肥紅繪様、千葉中央会計事務所長手島英男様、大本山成田山新勝寺貫主橋本照揆様、千葉県医師会会長藤森宗徳様が出席された。大学法人化後の病院経営の在り方から患者様の苦情に対する対応まで、熱心な話し合いがなされた。
○平成15年3月3日
いわゆる「医局による医師の派遣」と職業安定法との関係についての説明会

いわゆる「医局による医師の派遣」が職業安定法との関係において適正に運営されるよう厚生労働省から通達を受けた千葉公共職業安定所よりの要請で開催された。千葉職業安定所民間需給調整官早乙女裕氏により説明がなされた。
○平成15年3月20日
院内コンサート

今回は千葉大学モダンジャズ研究会による「ジャズコンサート」が行われた。楽しい一夕であった。

ただければ辛いである。
○平成15年4月1日
院内保育施設 (さつき保育園) の開設
女性教職員の就業を支援する目的で院内保育施設を設置した。これは、旧看護学校寄宿舎の改修に伴うものである。病児保育も行うので多くの方に利用している。

患者相談窓口の設置
患者等からの苦情および相談等に対応し、その内容の迅速な解決を図ることを目的として、医療福祉部に患者相談窓口を置いた。

ただければ辛いである。
○平成15年4月1日
患者相談窓口の設置
患者等からの苦情および相談等に対応し、その内容の迅速な解決を図ることを目的として、医療福祉部に患者相談窓口を置いた。

HSP患者シミュレーター導入される

—テロ災害対策の一環—

ただければ辛いである。
○平成15年4月1日
患者相談窓口の設置
患者等からの苦情および相談等に対応し、その内容の迅速な解決を図ることを目的として、医療福祉部に患者相談窓口を置いた。

本年度、人体模型シミュレーターが、テロ対策の一環としての basic life support の技能習熟のために購入され、医学部本館3階の第3実習室に設置されました。コンピューター制御のマネキンで、脈拍、心音、心電図、血圧、呼吸などの生理学的、薬理学的な反応をシミュレートします。モニターが接続され各種パラメータが表示されます。様々な病態、およびそれに対する治療薬投与や救急処置の効果のシミュレーションが可能です。たとえば、急激な呼吸状態の悪化 (呼吸停止など) がどのように生体に危険な状態であるかが、様々なパラメータによって経時的にわかります。また呼吸停止のシミュレーション時には、気管内挿管やアンビューバッグなどによる呼吸補助によって循環呼吸状態がどのように改善



していくのかがわかります。医学部自律機能生理学では、この人体模型シミュレーターを主に循環呼吸関連メカニズムの知識修得を目的として医学部3年生の生理学実習に活用します。3年次の学生には、臨床の現場で将来彼等が必ず必要とする治療上の基本的な手技について、その生理学的な意義を理解してもらえたらと期待しております。
— 長き臨床医になりたいという学生の希望に応え、また社会の要請に応えるために、私共の教室ではこれまでも基礎医学の学習時から「臨床に直結する生理学」という観点で実習を行って参りましたが、その一環としてこのシミュレーターを活用していく所存でございます。また、このようなシミュレーターの活用方法はおそらく全国でもあまり見られない新たな試みと存じますので、今後のより良い学生教育を行っていくために臨床現場の第一線で御活躍の諸先生方からも御助言頂ければ幸甚に存じます。他の学科や卒後研修など様々な学習の場で活用されることも期待されますので、ご活用下さい。
自律機能生理学
中村 晃、下山恵美)

エッセー

川上

望月良夫(昭30)

私たちの嗜好はもちろん日本料理であろうし、いちばん旨いというなら京都の板前料理にとどめをさす。

落ち着いた構えで檜のカウンターはせいぜい10席、主が客の目の前で調理する。料理をおまかせと注文すれば、前菜、刺身、煮物、焼き物、酢の物、揚げ物、蒸し物とつづき、ご飯、お椀、香の物、水菓子でしめくくる。

熱いものは熱いうちに、箸の出し具合に合わせて出てくる。

年に数回、土曜の夕方京都に着いて、名店探訪をはじめたのは20年ほど前のことだ。おりしも経済成長のさなかで、行儀の悪い客が雰囲気や壊すと困るからと紹介のない人は受けないいわゆる「一見さんお断り」の店が多かった。が、私は予約の電話で断られることはなかった。景気低迷が10年以上も続き、一見は死語となった。

南一、千花、熊彦、川上、浜作、なか一、河繁、河久、浜喜久、のり泉、その他を

訪ね、どこもさすがと得心した。しかし、主と二時間近くも向き合うから、これ見よがしの所作、多弁、客とかわす盃など気障りがあったり、一食の両輪たる酒が舌に合わない店もある。私は関西の酒より越乃寒梅・超特撰を好む。なかでは「川上」が断トツにすぐれていた。祇園の「力茶屋」に近い小路にひっそりとある。ほどよい広さの静かな空間、やわらかな採光、旬の料理に合わせた器、盛りつけと彩、加えて主の人柄だ。和風のガラス戸を押すと「お待ちもうしあげておりました」と松井ご夫婦。初めての頃、主・松井新七さんは50歳代なかばで、私よりすこし年長の長身であった。席に着くと、蒸したオルが出て、お盆の布巾の舌から盃が現れる。名酒でのどの乾きをいやし、ホッとすめる。

たいてい満席で、松井さんは調理に専念しながら、耳で客を掴んでいる。サービスはお内儀と追いまわして過不足なく、主と心を一にしているのがよくわかる。太平洋戦争中、松井さんは旧制中学を卒業後、海軍兵学校を受験、最終試験合格者となったが、立命館大学に進んだ。学徒動員中の工場で敗戦を迎え、戦後、料理の道を志した。1951年(昭26)、父方の伯父「ちも(昭26)、父方の伯父」ちもと二代目・松井新七の懇望で松井家の養子となり、大阪府南区「大野屋旅館」の次女と結婚した。1959年(昭34)現在地で開業し今日に至るが、養父死去により家庭裁判所に許されて、祖父以来の通り名「新七」を襲名している。ちなみに「川上」は10席のカウンターばかりではない。玄関を入ると右手に4帖間、2階は座敷が3つで、10数名収容でき、10帖間には山本五十六元帥の扁額「清修養和」が目立つ。茶屋への仕出しもある。松井さんは毎朝、錦小路へ買い出しに出かける。旬の鮮魚介や野菜は、どんなに値が張っても最高品を求めるといふ。味のよしあしは8割以上が素材によるから、実物を見極めるのが料理人の基本姿勢だ。鯛と鰯は明石産の逸品が、或るルートで「川上」に運ばれる話をきいた。

また、食器も良い。永楽象彦、信楽、備前、織部などの皿や鉢を、季節と料理に合わせて使い分ける。春なら桜皿、秋は楓皿、夏は涼しげなガラス器を併用する。名工の陶磁器も、高価であろうが惜しげなく使う。椀や盆も、輪島、春慶、秀衡と多彩で、箸置きにまでも風情を出す。松井さんの調理姿を見ていると、旨さが増幅される。板前料理の一食は、音曲はないけれど小さな舞台芸術ではないか、と川上に通うようになってから思う。味覚、嗅覚、触覚、視覚の総合至芸である。松井さんは2003年2月4日喜寿を迎え、嬰鑠として板前人生を歩んでいる。同じ時代を生きた幸運を思うことしきりの昨今だ。私が大学を卒業した頃の京都は遠かった。今や「のぞみ」や「ひかり」の増発で、東京・京都間の時間的距離は近くなった。「ゐのほな」で読んだと予約電話を入れて口福の最高峰を堪能してはいかがですか。

第5回ゐのほな同窓会学外研究助成募集要項

- 第5回(2003年度)ゐのほな同窓会学外研究助成の応募を左記により受け付けます。
- 一、助成対象 本会会員(甲および乙)で、大学およびそれに準ずる研究所以外の施設に勤務している医師および歯科医師が、個人またはグループの代表となつて行う研究。
- 一、助成金 本年度の助成総額は350万円とし、1件につき50〜100万円を予定しています。
- 一、応募方法 6月1日から7月31日までに申請して下さい。
- 一、助成研究の決定 選考委員会および常任理事会の議を経て、会長が行います。審査結果は2003年11月末までに各申請者に通知すると共に、ゐのほな同窓会報に掲載します。
- 一、問い合わせおよび申請用紙請求先 千葉大学医学部内ゐのほな同窓会事務局
右選考は「ゐのほな同窓会学外研究助成規定(ゐのほな同窓会報130号に記載)」にもとづいて行われます。

第8回(2003年度)

ゐのほな同窓会賞受賞者決定

- 功労賞 高橋 康(高橋胃腸科医院院長、昭30) 「予防医療・健康教育による地域医療の充実」
- 小俣 政男(東京大学大学院医学系研究科消化器内科学教授、昭45) 「病態解明に基づくウイルス性肝疾患の治療」
- 学術賞 長谷川 潔(東京女子医科大学消化器内科講師、昭56) 「B型肝炎ウイルス株の多様性と病態」
- 石井 秀始(自治医科大学医学部分子病態治療研究センター講師、昭63) 「ヒト染色体欠損部からの癌抑制遺伝子の同定とその臨床応用のための開発研究」
- 船橋 伸禎(千葉大学医学部附属病院第三内科助手、平元) 「マルチスライズ(M)による循環器疾患の三次元画像診断」
- 浦野 友彦(東京大学医学部附属病院老年病科助手、平6) 「乳癌におけるエストロゲンによる細胞増殖制御機構の解明」

編集後記

この度、ゐのほな同窓会報編集委員長が白澤浩教授から古関に替わりました。ここ数年来、同窓会の皆様御協力をもって、会報は質・量ともに著しく向上してきました。同窓の諸先生方のニーズに応えうるよりよい形を求めていきたいと思っております。御支援の程、よろしくお願い申し上げます。(古関明彦・昭61)